
ブリリアントグリーン close to kira.

青柳うさぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブリリアントグリーン close to kira .

【Zコード】

Z8477Z

【作者名】

青柳「つね」也

【あらすじ】

男子高のなかで起る ちいさな恋愛と、喜びと笑い、ちょっと
り悲しみの物語。

1 (前書き)

登場人物の紹介

緑王高校

1年生

宝生

ぼさぼさ頭・メガネっ子の演劇部員。気弱でキヨドつ
ている。素直で天然。

3年生（漢字検定研究会）

吉良… すぐ手が出るキツい性格だが、見た目は おとなしめ
文学少年。ケータイ小説を書いている。お笑い・アニメ・冒険小説
が好き。

陶冶

1年のときに演劇部を立ち上げ、ずっと部長。香氣・
温和な性格、ちょっとM氣アリ。映画・演劇全般好き。

凧

なぎ
… ぽわんとした性格、基本何事も拒否しない。外見は可愛
いけどモトクロスのプロライダーを目指しているツワモノ。レース
観戦・アニメ好き。

佐野… 周りをシビアな目で見ていて、さくつと怖いことを言
う。派手めな外見、ムダに演技力（特に女役）アリ。恋愛・泣ける
系映画が好き。

間々原ままはら 成績優秀・運動神經もよくイケメン。2年までバレ一部のエースアタッカー。恋愛・泣ける系映画が好き。長身。喫煙する。

「あのっ、先輩…」

今にも消えそうな声が降ってきたのは、図書室で読書をしてこられたからだつた。

『西遊記』の4巻。

ちょうど俺が好きなお約束シーン（悟空が頭に嵌めてるわつかを三蔵法師に締め付けられてこむ）を読んでいたところだつたんで、普通に無視した。

だいたい、本を読んでる最中に話しかけてくるとか、空虚読めねえにも程がある。

一人にしどけオーラを周りに知らしめる 最も手っ取り早い方法は、開いた本を片手に持つこと。そうしておけば、余程重大な用件でない限り 誰も話しかけてこないはずだ。

しかし相手は それが通用するような纖細な精神の持ち主じゃなかつたようで。

「あ、あの…、あのおっ。吉良先輩。^{わい} も、吉良先輩つてば。も、もしもお～しつ」

弱々しげくせに、シシコム。締め悪すぞー。

俺は仕方なく視線を上げ、
ようやく その声の主が あいつだと知ったわけだ。

ヌボーネツとしたいつもの立ち姿で、
ほんの一瞬だけ 俺はフリーズした。

あいつから声をかけてくるシチュエーションなんて 一つも思い
浮かばねえ。

何で？ 何で俺に？

不覚にも動搖しそうになり、慌てて気持ちを静める。

「うつせえな。何だよ？」

出来る限り冷たく問うと、
あいつの表情は 早くも引きつった。

「あ、あつ。はいっ。オ、オレ 先輩にお願いしたいことがあります
してつ…」

おーおー、完全に目が泳いでるぞ。

まあ、1先生が3年に話しかけるだけでも 緊張するだろうし？
俺の印象だと、「イツはいつも他人の後ろに隠れてる系だし？
『がおーー!』って吠え付いたら泣き出しそうだ。
わざと低い声で凄んでやつた。

「はあ？ こきなりお願いだあ？ 図々しきな てめえ、一年のくせに

相手はとたんに真っ青になり、
「すみませんすみませんすみませんっっっ！」
床に平伏しそうな勢いで頭を下げまくった。

元々ボサボサだった髪が なおさら乱れ、
重たい黒縁メガネがずり落ちそうになる。

コメツキバツタみたいな姿を見ているのもなかなか面白いけど、
ここは図書室だし。

「騒ぐんじゃねえ。 場所 わきまえろ」

そう突き刺すと、はつと口を閉じた。

「すみませ、 … つ」

おなじ言葉を発しけ、
慌てて両手で自分の口をふさいだ。

おい、鼻までふさいで「ふ」ってなつてんぞ。
アホすきる。

放置してみたい気もしたが、用件が知りたいし。

「小声で、手短に、とつとつ話せ」

急かすように机をコシコシ指先で叩きながら、そう命じた。

相手はびくっと身を縮めたあと、「は、はい！」何度も頷いた。

「あ、あのオレ、一年の^生つていいます。えとえと、

中学出

身で、クラスは4組で、担任は××先生で

ああ、はいはい。

…知ってるから、んなコト。

「手短い。つったよな？」

ジロリと睨むと、寅生は「はひつ！」って竦み上がった。で、いきなりガーッと言つた。超手短い。

「脚本を書いて欲しいんです！」 演劇部のつー。

は？？

驚きすげひ口。ポカソな俺に、こいつ気付いてねえな。つか、田えぎゅつとつむつてるから、見てもいねえな。

「夏の大会で、どーしても優勝したいんで、そのための台本をつ！先輩、ケータイ小説 書籍化されましたよね？ マジすげえです、カミです！ その才能を演劇部のためにちょっと使つてくれませんか？ お願いします、ブラック・パール先生！」

勢いに乗つてトンデモネーこと喋り始めたんで、

バコン。

思わず殴つちまつた。

「小声で。つったよなあ？ われ両の脳に詰まつてんのはモンブランか？」

「ふ
ふ
い」

殴られたトコを両手で押さえながら、あいつが涙目で俺を見た。

「すびばせん、ブラック・パ」

今度は俺が宝生の口を両手でふさいだ。
このまま呼吸困難にしたるか？！このヤロー――

「何で知つてんのかなあ？」俺がソレだつて

「ふはー……えり、ん！」。陶冶冶てんぱいが、おひえてくれま
ひた

鼻をふきかれてるんで、醫を取りにぐっ声であいこが答えた。

陶冶 あの野郎

そういうやあ演劇部を立ち上げた張本人はあいつだつたよな。
男子高で演劇部とか、なんも楽しくねえ。　よくやるわと呆れて
いたが。

舌打ちするど、

「ど、どおか お願いひまふ…」

俺の手のひらのしたで、宝生の唇がもじもじと動いた。

「オーディションをこじ、オレ 部に帰れまへん」

ふん、なるほどな。

陶冶を始め 演劇部員のヤシウは、面倒な役を 部内で一番下つ端のマイシに押し付けたつてわけだ。

「も、もひうる、ひやんとほれひもひまふ…」

「は、何? ウザHな、もつとハツキリ喋れつ」

「まー…」

「ふるうむした田で訴えられて、

俺がここの鼻と口をふぞこでんだった。と悪い出した。

仕方なく手を離すと、

ホツとしたように吐息をついた宝生は、続きを話した。

「 もひうる、ひやんとお祓ほします。図書カードとか 学食の食券

10枚綴つとか」

「んなショボイもん いらねえわ

「 も、もですか…、やっぱ現ナマがいいんですね、吉良先輩

思つてやつは生の鼻をつまんでやると、「ぴーー!」と笛みたいな声が出た。

「いたいイタイいたいれすっ」

「てめえから見た俺は 金の亡者か？ ああ？」

「すびばせんすびばせんっ」

「たつた今から『すみません禁止令』が発令されました、言つた奴は『パンの刑』

「ぞんなああ」

涙目になつてゐる顔を見ていたら、ゾクゾクしてきた。

こつして向かい合つて立つと、ほんの少し宝生のほうが背が高い。
170ちょいくらいか？

てつきり俺より小柄だと思つていたのは、コイツが猫背なせいらしい。

俺にしては珍しく、後輩との接触を楽しんでいる。
もうしばらく遊んでやつてもいいかもしない。ふとそう思った。
「いいよ、書いてやつても

つまんでいた鼻を離しながら、軽い気持ちで口にした。

「ほんとですか！」

舞い上がる宝生に、「ただし」と人差し指をつをつけた。

「おまえが主役を演る」と

「ほえ？」

言葉の意味を理解するのに、数秒かかったようだ。

もつかい鼻をつまんでやれりと手を伸ばしたとき、

「ま、またまた『冗談をつ…、無理に決まつてゐるぢゃないですか、
入部して2ヶ月のペーぺーですよ、オレッ』

言われなくともわかる、簡単な計算だ。

いま6月で、こいつは1年生。

「よくある話だろ。新人を主役に抜擢して周りをベテランで固める
つて」

「いやいやいや、それが出来るのは すつゞい期待の大型新人の場合
です。自慢じやないけど オレまつたく該当していません」

「いやいやいや 言い出したんで、『うるせえな』と突き放した。

「話は以上。あとは部に帰つて相談しな」

それだけ告げて、俺はどかっと椅子に座つた。
机に置いておいた本を手に取り、続きのページを開く。

戸惑つように しばらくその場に突つ立つていた宝生は、
これ以上 何か言つても無駄と分かつたらしく、すゝりすゝりと図書
室から出て行つた。

開いたページの文字を追つてはいるが、

俺の心はもう西遊記から何千マイルも遠く離れてた。

あいつを主人公にした脚本。

やる所存なら、本人と間違な性格の主人公がいい。堂々として、明るくて。いかにも あいつが困りそうな、無理そうな。

考え始めたら止まらなくなつた。

俺が宝生を知つたのは、一ヶ月くらい前だつた。

その日 一年生は体力テストで、朝からグラウンドと体育館を占領してた。

こいつちは普通に授業なんで、うるせえなーと思いつながら午前中を過ぎた。

昼休みになり、図書室へ向かう途中の渡り廊下で、外の水飲み場で顔を洗つてる一年生を見かけた。

さつきまで体力テストをやつてたから、もちろん体操服姿。

他の一年はとっくに昼メシ食つてる時間なのに、まだあんなコトしてるなんて わうとうトロイ奴だな。

ちりつとそりつただけで 通り過ぎようとしたとき、あいつがオロオロし始めた。

『あれつ？あれえ？』

びしょ濡れの顔で、田を開じたまま、両手をひたひた彷徨わせている。

その原因は一目で分かった。

水飲み場の端っこに準備しておいたらしきタオルが、地面に落ちている。

いつもなら知らん顔して通り過ぎていただろうナビ、
そいつの動きがあまりにもドン臭く、いつまでたっても地面のタ
オルに気付かないんで、
イラつときた俺は、そつちに歩いて行つた。

落ちているタオルを拾い、彷徨い続けている手にばしんと押し付
けてやつた。

『あつ』

そいつは、田を開じたまま嬉しそうにニコニコと笑つた。

『す、すみませんつ』

まず顔を拭けよ、そして田を開けろや。

などと心んなかで素早く突っ込んだけど、その笑顔が直球で。

両方の頬に、くつきりと浮かぶ、えくぼに、俺は田が釘付けにな
つた。

『いひいう時は、ありがとうだううが』

から、らしくなく動搖したせいか それだけ言って すぐに立ち去った

あいつはソレが誰だつたか知りもしないだろう。

田を開いたまま、ポカンと突っ立ってたし。

けれど いつ ちは何となく気になつて、

渡り廊下まで戻つたあとに、ソリ様子を観察してた。

よつやく顔を拭いたあと、あいつはポケットから出した ものす

ヘンな奴。

なんであんなメガネかけるんだ？

顔を隠すなら、どうして髪型にするんだ?

さつき びしょ濡れで笑つたとき、すげえキレイな顔してたのに。

そんな疑問が湧いた途端、その一年生のことが知りたくなった。

ちょっと調べたら、名前もクラスもすぐに判明したんで、気が向くとちょこちょこ様子を見るよつになつた。

そのたびに俺は、あいつが猫背で、自信なさげで、引っ込み思案で、というマイナス面ばかり知ることになり、めっちゃイライラした。

なんでもそんなオーバーホールなんだよ、
いつもいつも かこやくなつてんだよー。

ときどき本人に直接、怒鳴りつけそーになり、堪えるのが大変だった。

他人のことでストレス抱えるとか、俺こそ なんで?だ。

さすがにアホらしくなってきて、
もう見ないようにしようと決めた矢先、
むこうから接触してくるとは。

まあ、あいつが主役を?ぎ取れなければ これつきりの縁だけど。

次の日の毎休み。

陶冶にメールしたら、ラグビー部の部室にいるといつ返信が来た。

ちつ。

あまり近寄りたくない場所。

しかも運動部の部室は外にあるから遠い。

でも仕方ねえ。

他に誰もいないことを聞いてから、俺は部室に向かった。

つつても、陶冶はラグビーなどといつ熱血スポーツとは一ミリも
係りがない。

とっくに廃部になつたんで、部室を勝手に使つてただけだ。

いちおう教師の許可は得ていて、こゝは『漢字検定研究会』なる団体が使つてることになつてる。そういう裏工作に長けたワルイ奴がいるのだ。

立入禁止と書かれた紙が貼つてあるドアを開けると、室内はイカレた中2男子部屋みたいな様相を呈していた。

緑色に塗られた壁には、びっしり貼られた 水着女のポスター、レーシングチーム・サッカーチームの旗。

床に散乱するマンガやエロ本、ビデオやCD。家からこつそり持ち寄つたモノや、貰つたけど いらぬいからとりあえず置いていつた品々。

それらに埋もれるよつとして陶冶が転がつていた。

「よお～、キラちゃん。おひや」

「マジで陶冶だけなんだ？」

部屋全体に視線を走らせてから、俺は奴の隣に座つた。

床はコンクリだけど 部分的に厚みのあるラグが敷いてあるんで、そこに座れば尾？骨が痛くならずに済む。

「そ。四月から昼休みが10分減つたじゃん？しかも俺とキラちゃん以外 みんな文系で、ここからずいぶん離れた校舎だろ？すっかり

足が遠のこひまつて、最近じゅ俺の個室になつてんの

「それでこんな散らかつてんだ?ちつたあ片付けろよ。なんなら俺
が片つ端から捨ててやるーか」

いやん!ヤメテ!などとシナをつぶしながら、奴は申し訳程度に
雑誌を積み上げた。

「つかキラが来るのなんて半年ぶりへりこじやね? 図書室ばつか
通いやがって、このH口男おお~」

「トイッは、図書室にあるのは古典的な本=純文学=H口本。
と思い込んでるアホなんで、そーですねー。と適当なあいづちを
打つておいた。

この部室が空き部屋だと発見したのは、俺と陶冶と、あと3人。

当時1年生だった俺たちは、たまたま掃除当番が一緒に、サボつ
てぶらぶらしていたときに、たまたまH口を見つけただけの関係。
けど、しうつちゅう集まつてているうちに仲良くなつていつた。

まつたく性格の違う者同士だったけど、映画が好きとこつー点の
み 5人とも共通してたんで、
昼休みのたびにココに集合して 陶冶が家から持つてきた小型テ
レビでDVDを観ていた。

俺が行かなくなつたのは、去年の秋。

そのあと他の奴らがどうしていたのか、特に興味もない。

「間々原とか、おまえに会いたがつてたじえー」

聞きたくない名なんで、無意識に眉が寄る。

「別に 用ねえし」

「うひわ、つめてー。つかキラちゃんじーわ

るせえんだよー」

俺は吼えて、陶冶の首を締めてやつた。

「分かってんだろ、なんで俺が来たか。ああ?」

「何のことすか、ブラック・パール先生」

魂を落とす勢いで 思いつきつ首を締めてやつた。

おえええ…って陶冶が呻き出したんで、
仕方なく手を放してやつた。モザイクかける必要性のあるモン
見たくねーからなつ。

「なんでバラしたんだよ、てめえ。誰にも言つたよな? なあ
おい、あたまの『』は空洞か?」

頭を拳でグリグリしてやると、

「それヤメテえ! いてえつ、ああつ、イタ・イイーつ」

そこはかとなく喜んでるし。

「こつマゾだったのかー…そんがもしれない気配は前からあつたけど。

気持ちよくしてやる義理はない。

イッキにやる気が失せ、俺は奴から手を放した。

わざとらしく咳き込み、陶冶が枯れた声で言へ。

「バラしてねえよおおー…」

「は？ 」の期に及んでよへ言へんなあタコが

「んや、マジで。宝生の奴、当てるくんだもーん

詳しく述べると、流れはこんな感じ。

夏の大会では絶対に優勝したいよなあ。どもしたらいいかなー？
(陶冶)

オリジナルの台本だと大会で高評価を得られるみたいだぞ。(部員A)

誰か台本書いてくれないかなあ。(部員B)

ケータイ小説家のブラック・パール先生に依頼したらどうでしょ
うかっ。オレ、ファンなんです！(宝生)

誰だ ソレー？(一同、ざわめき)

パール先生の小説、書籍化されてるんですよー！ブログに載つてる

日記やプロフィールを読むと、たぶん高校生の男子で、近くに住んでる人だと思うんですね（宝生）

あー、あいつか。俺、ダチなんだよね～（陶冶）

えつ？！ も、もしかしてつー。それって吉良先輩ですか？（宝生）

大当たりいー！よつしゃあ。宝生、キラちゃんに台本 頼んで来いっー（陶冶）

「ま、こりこり いきそつなわけよー」

しけつと壇上に陶冶の頭を、俺はバコンと殴つてやった。

「ややまが『ダチなんだよね～』とか言わなきゃバレなかつたんじゃねーか！」 大当たりいー！ じゃねえわ！否定しきつつの！

「でもさ でもさあ、すげえ！って思ったから つい肯定しちゃつたんだよー。俺のダチだつて情報だけで パール＝キラちゃん、つて推理しちまつんだぜ、すごくね？きっと宝生の奴、1行も逃さずにパールのブログ読んでたんだじえ～」

たぶん そうなんだろうな。

ブログには日記っぽい文章もちよこちよこ載せてるんで、俺が見た景色とか 身近にいる人間の観察とかから垣間見える日常が、

あいつの見てこるそれとリンクしていたとしてもおかしくない。

ちいさな手がかりを拾い集め、つなげていけば、近くに住む高校生男子・陶冶のダチ、という少ないソースから俺にたどり着く可能性はゼロじゃない。

しかし。

「あいつ、見かけによらずHロHロだな」

「だよな　だよなああ！　パールの小説ってかなりハードな官能系だしね」

生々しきな。

けど、冗談でもなんでもなく、それがまな成り行き上、俺はそういう小説ばっか書いてこる。

いちおう自分が面白いと納得できる内容しか書いてない（つか書けない）んで、

『笑えるエロ小説』みたいな路線になってる。

「宝生の萌えツボってどのカツブリングだらーなあ？　小学校教師と児童かな、クラスメイト同士かな。それともフリーターとジュエリーショップの女社長？」

「 Bieberでもいいのつの」

いつか聞いてみたい気も若干するけど。

ま、とにかく、バレちまつたものほじょーがない。

「演劇部内なら許すけど、絶対にこれ以上 広めるんじゃないぞ」「や」はダイジョブ。部員のみんなに、極秘事項だぞーってよーく言い聞かせてるんで

どうだか。

「こままでの こきわつを聞いた限り、全然まつたく信用できません。俺が向ける疑わしい目に構わず、陶冶が二コ二コと聞いてきた。

「で？ 宝生に主役やれとか、なに企んでんの キラちゃん？」

「面白そーだから。あの氣弱な奴が本番前とかにガタガタ＆ブルブルする様子が見てーから」

「げーーー。相変わらず見事なうつぶり」

怖いわあ、震えちゃう。とか言いながらゲハゲハ笑つている。

「決まりそつか？主役」

「まだ未定〜。俺は大賛成だけどさあ、無理だろ〜って意見も やつぱあんのよ

ふうん。」いつが部長してるくらいだから、演劇部つて自由奔放っぽいイメージだつたけど、保守的な輩もいるんだ？

けど陶冶が賛成してなんなら、ほぼ決まりだろ。

そんなことを漠然と思っていたら、

「けど あいつ、素材はいいからなあ～。もったいないことは思つてた」

つこのよつと陶冶が言つた。

やつぱこいつも気付いてたか。

そういう目を持つてるのは知つてる。

ちやらんぽらんな奴だけど、ダテに部を立ち上げたわけじゃない。いい加減に部長をやつてるわけでもない。

「精神的なモノが変われば、化けるかもねえ～？」

含み笑いしながら、俺を横目で見遣る。

思つてたことを見透かされたようで面白くねー。

「何言つてんだ。あのままのまつが笑えるつつの」

そう投げて、俺は立ち上がつた。

ドアに手を伸ばしかけ、ふと振り向く。

「そういうや、何で おまえら大会での優勝に拘つてんだ？」

軽い気持ちで聞いたんだけど、ちょっと後悔した。

陶冶の目が、よくぞ聞いてくれました！ みたくギンギンになつたから。

「俺らをバカにしてる女子高があつてさあ！一実績はあるし 確かに上手いんだけど、大会で顔を合わすたびに『男ばつかの演劇部なんてバカじゃないの、ありえない！』って見下した態度とつてくんなの。

超ムカツクから、ぜつて一勝つてやろう！つてみんな燃えてるわけ！まったく あいつら、けよつとキレイだからって 女だからって、えばかりやがつてええ」

ほつといたら ずつと悪口言つてそつだ。

「あーーそりや 大変。 そんじやー！ つて、俺はさつと退散した。

宝生が俺に会つにきたのは、それから2日後だった。

放課後、いつものように図書室で読書していると、緊張しまくりオーラを纏いつかせてあいつが近づいてきたわけで。

10M先にいても分かるほど動きがおかしい。超ギクシャクしてる。

目の前で立ち止まつたんで、俺は親切にも 読んでいた文庫を閉じてやつた。なのにだ。

「やー・やー・やうやう先輩つつつ！」

俺は立ち上がり、
あいつの頭をペンケースで殴つてやつた。

痛あ！ひどいですつ、せんばー

親の敵を見つめるような目で睨んでやると、カタギ

座れ。と親指で椅子を示し、オロオロしながら奴が腰を下ろすまで、俺はヒトコトも喋つてやらなかつた。

「あ、あのぉ…、わざわざへましたこと、謝ります…。図書室では静かに、でしたよね」

よつやく小声でさう言ひきだんで、頷いてやつた。

「モンブランの脳みそでも
1ミクロンくらいは学習能力備わって
んだな」

やつと口をきいてもらえたことが嬉しいのか、

あいこにはあいこと明るい表情になつた

ダサくて でつかいメガネのせいで、はつきりとは見えないが。

「は、はい。むやんと覚えてます、先輩に言われた」と ゼンぶ。
でもでも、さすがですね。脳みそがモンブランなんて素敵な表現、
なかなかできません。ほんとに脳みそがモンブランだつたらどんな

に素晴らしいだらうって、オレあれから ずっとと考へてました

珍しく滑らかにアホなこと言ひて、嬉しそうに笑う。

せつかくの笑顔なのに、顔がよく見えねえからイライラした。

「バカか。モンブランはケーキだから価値があんだよ、てめえの頭んなかに詰まつてたつて素晴らしいもなんともねーわ」

そう投げて、俺は右手を伸ばし、宝生のメガネを取つてやつた。素早い動きだつたんで、鈍いコイツは氣付くのに時間がかかったらしい。

「うー

慌てて自分の顔を両手でおおつた。

何で隠すかな。

ムツときたんで、その手をぱちんと叩いてやつた。

「痛つ。せ、先輩つ

「

「何だよ、おまえは。直接見られると妖怪にでも変化するわけ?」

「く?は? あはは? あはは? そんなスゴ技、持つてませんよお

何がウケたのか、楽しげに笑う。

顔を隠すことは諦めたようだ。

メガネを返す気になれなくて、俺はそれをかけてみた。

「重つ。こんな古臭いメガネを平氣で売つてる店の根性を尊敬する
わ」

サイズはちょいどいい。
度が強いかもしないんで、クラクラするかと用心してたけど、
まったくそんなコトなかつた。

つか。コレただのガラスじゃね?
何で?

「いつマジで顔を隠すためだけに かけてるってか?
そんな疑問を持ったとき、

「メガネ似合いますねー、先輩」

宝生は、俺を眺めて そんなことをぼざいた。

フザケてんのかと思つて睨んだら、本氣でうつとつ見詰めてるじ。

「こんなダサイメガネが似合つてたまるか」

ソックー外して、突き返してやつた。

「で? 俺に何か用?」

促すと、奴は『ずっとかり忘れてました!』的な焦つた表情を浮かべたあと、よつやく本題を切り出してきた。

「あの、部で話しあつた結果、オレが主役でもいいという結論になりました…。なので、吉良先輩つ。脚本 よろしくおねがいします」

「

最後のところでわざわざ立ち上がり、深々と頭を下げた。
大げさな。

「ふーん。よく みんな納得したな」

「はいっ。あ、でも。実はこいつか条件を出されてしまいまして…。
これなんですが」

そう言って 細かい字が書いてあるメモを差し出してくるナビ、
俺は受け取らない。

「えと、えとっ、…先輩？ これを満たす内容でお願いしたいと、
部員のみんなから言いつけられていて…」

ザケんじゃねーよ。

俺は低く凄んだ。

「あれこれ注文つけてくるなら自分で書け、ばーか。って言つとけ」

「はひへーー」、困ります、そんな

「あのな。こっちは商売でやってんじゃねーんだよ。思い通りのものが書いて欲しいならプロに発注しろや」

反論する要素が一つも思い浮かばないのが、

宝生は口をパクパクさせた。

でも俺の言つてることが常識的なのは、ちよつと考えりや分かるはずだ。

まあ、こいつは部内でもつとも下つ端で、部員みんなの意見を俺に伝えることが仕事なんで、個人的な意見を述べる権限もないんだろーけど。

これ以上こつちから話すことねーな。

どつちみち こいつ、他の部員らに相談しに戻んだら。

そう思つて文庫を手に取つたとき、

「わかりました」

「」となくトーンダウンしたよつた宝生の声が降つてきた。

「先輩が書きたいものを書いてください。オレもほんとは、そのほうがいいし」

さつきまでと違つて、ヘンな力が抜けた声と態度。

この場で判断できるよつた根性も、その権限もこいつにはないと思つてた。

ちよつと意外で、俺は宝生の顔を凝視しちまつた。

「あつ。…え、えと、あのその」

刺すよつた視線に気付くと、いつものモードに戻つちまつたけど。

「Hラソーな」と言ひやいましたけど、でも、あの、オレ 頑張つて部員のみんなを説得するんで、だいじょぶです。任していいださい。もしかしたら時間がかかるかもだけど、気にせず、書き始めてくださいね」

「つかえ突っかえ、そう説明した。

「へえー。

」「こいつって、

俺はズボンのポケットからケータイを出し、内蔵してあるSDカードを抜き取った。

それを持った手をグーにして宝生の前に突き出すと、ポカんと口を開けて俺の顔とグーの手を見比べた。

「あのお？ … いたタタタタッ！」

グーで こめかみをグリグリしてやつた。

「さつわと受け取らんか」

「え？ えつ？」

戸惑いながらも 両手のひらを差し出してきたので、グーの手を開いて そのつまにSDを落としてやつた。

田をパチクリしてみると、まだ分かつてねーんだろうな。

「台本。いちおう書いたんで、目を通すよう伝える。そつちからの修正とか細かい指示は、データじやなく出力した紙で持つてこい」

そこまで言われて、やつと理解できたよつだ。

「だ、だいほん…、つ？！ええええーーーも、もうつーーーもうつ書き

ばら

俺が宝生の脳天をペンケースで殴った音

ほら見ろ、でけえ声出すから周りの視線が集中したじやねえか。

「あ！
す、すみま」

せん。まだ血わきで、あこつせ流れて手のひらで口をふれこだ。だ。そのまま、押さえられなつてふりて、こいつをひと笑つ。

「あ、あつがむいれこめかう。でも正直オフードしてなか
ったのに、ルースト…？」

「別に。暇だつたから」

実はこいつが話を持ってきた3日前から書いていた。

やたら筆がのつたし、陶冶が賛成してたんで、主役取つてくる予測はついてたし。

「感激ですうつ」

当たり前みたいに両手を握られ、ギョッとした。

「どうしよう、読むの すげえ楽しみ…！心臓バクバクですっつ

つか、こっちもバクバクなんだけど。
何だ何だ、手え握られたくらいで、

どーしたんだ俺は？

「…読んでガツカリかもよ？」

「ありません、絶対。だってだって これを書いたのはブラック・
パール先生なんですよ？あの名作『バイオレンス・エンドレス・
ピストン』彼女はワイマックス♪ とか『執事としつぽり』を執
筆された、ブラック…」

奴の手を振り払い、

頭部をつかんで力任せに揺さぶってやつた。

「あわわわわわわわ

「その名を呼ぶんじゃねーよ、おいらあ

演劇部内だけの極秘事項だらうが！

「でしたね。…えへへ

いの野郎。

思つ存分一ヤケやがつて。

「やつやと持つてけ！」

しつしつ。片手で追つ払いながら、
俺は今度こそ文庫を開いた。

読書の邪魔、といつて睨んでやると、
あいつは慌てて立ち上がった。

「ではつ、失礼します。ほんとにホントに ありがとや！」
た！

ペニヒと頭を下げ、パタパタ走りだした。

「ううああー！図書館で走んなー！」

追つかれるように図書委員の怒鳴り声が聞こえてきて、
ふはっと吹き出しちまった。

やっぱ、抜けた奴。

でもバカじゃない。

今日、あいつ一度も「すみません」を言わなかつた。

前回 俺が禁止令を出したんで、守るうと努力してるっぽい。

それにして、手を握られたとき なんで あんなにドキドキした
んだ。

予想外に奴の手のひらが あつたかかったからか?
握るというよりも すっぽり包まれた感じだつたし。

つか…なんであいつのまうが俺より手のひら 大きいんだよ。

そこは、かなり面白くなかった。

宝生が脚本の修正を持ってきたのは、その翌々日だった。

しかも朝、俺の教室まで あいづはわざわざ やつて來た。

勇気を振り絞つて3年の教室に來たのは、顔を見れば一目瞭然。俯きすぎで つむじしか見えねえし、猫背に磨きがかかっていて俺よりも5センチは背が低くなつていた。

「何だよ？ わざわざ」

無理してこんなトコ來なくとも、放課後でいい。」
そう思つて聞くと、奴は どもりながらモモ答へ始めた。

「ほ、ほほ、ほんとは昨日 渡したかったんですが…、遅い時間になつてしまつたので…先輩は もう帰られていて。は、はやく渡してください、教室に来ちゃいました」

クラスの奴らは、例外なくこの挙動不審にオドオドしている一年をジロジロ見ている。

なので、ますますここつも堅くなるわけだ。

「朝っぱらからシケた面見せてんじゃねー、テンショントがんどうがーおら 猫背つ！」

つて、俺は背中を思いつきり蹴つてやつた。

盛大に口をめいたあと、奴は「はひつ！」裏返った声で答えた。

「えと、部員全員、読ませていただきましたっ！ いくつか修正が入ったので、見てくださいっ！」

最初からそうやって言やあいいんだよ。

ま、それが出来てりゃ「イツも苦労しねえか。

「わかった。そんじゃ

差し出されたプリントの束を受け取り、それを読みながら俺はさつさと自分の席に向かおつとした。

が。

「あのッ！ 先輩」

珍しく気迫ある声で呼び止められた。

よからぬことを言こそつたな気配に、俺はがばつと振り向く。

「台本、すげえ。すうとうく面白かったですー展開が超早くて 刺激的で、笑えて。ですがブラック

ふう。

ぎつぎつセーフ！

フルネームが出るまえに宝生の口を手でふせぐ!! ション、成功ー

ふうふう言ひてる奴の耳に、冷たく命令した。

「今度それ言つたら、台本没収」

「ふええええ！氣をつけまふーー！」

手を放したら、ピューーーと逃げてった。

まったく…朝から疲れさせやがつて。

でも、あの脚本を面白いと思える感性は認めよう。

俺が書いたのは、曾祖父の記憶のなかに飛んだ高校生の話だ。

気がつけば 戦地で、曾祖父として兵隊になつてゐる自分。
混乱するなか、

周りに励まされり、勇氣をもつたりして、
その時代で生きる覚悟をもつ。

しかし射撃の腕を買われて重要な暗殺任務を命じられ、
迷った末に引き金を引けず、敵から弾丸の雨を浴びちまつ。
そこで現代に戻る（夢を見ていただけ）。という、
言つてしまえば 鉄板な落ちだ。

重くなりそうだけど、兵隊仲間は愉快な奴らばかりだし、主人公
も明るい性格なので、全体としては笑える場面が多い。

けど、命の遣り取りをするシビアな戦闘シーンだけはびしつと怖
い。

そんな対比がイケてるストーリーにしたつもり。

自分のセンスを先生に理解してもらえたのは満足だ。

ちょっと いい気分で席についたとき、

まるで待つていたように やたら目立つ人物が寄つて來た。

むや苦じい男子校のなかでカクジツに浮く、華やかオーラを持つ
た奴。

「キラッち、わっかの誰よ?」

「は? …佐野^{さの}?」

久々に見た、こいつ。

なんでいるんだ? 文系は別の棟なのに。

思ったことが顔に出てたのか、

「んな珍しそーに見なくていいじゃん。鈴木にジャージ借りに來
たんだよ」

わざわざ説明して、苦笑いをした。

「俺とは喋りたくねーか? キラッちよ

「んなことねえ

ウソだねえ。

「マジで? てっきり避けられたんだと想つた

はあー。
俺は溜息をついた。

こいつは時々うつうつ喋り方をし、
俺を面倒くせえ気分にさせめる。

「おまえな、そーやつて考へる」と自体、自意識過剰だつた

「だつたら また前みたいに5人で遊ぼつよ。毎休みは難しーけど、放課後なら集まれんだろ。知つてゐる? 間々原 とつぐに部活 引退してんだぜ」

「悪い。勉強しねえと。俺、無理めなトコ狙つてつから
暗に おまえも受験生だり、つて牽制したつもりだつたけど。
佐野にはせんせん効果がなかつた。

「えー、こんなモン書いてやる時間はあるべせにー?」

と、俺の持つてる台本を指先でつづいてきた。

「あの汎えない1年、演劇部なんだ?」

つて、だいたい把握されてるし。

さつき宝生が『エカイ声で喋りやがつたせいで。
あのヤロおー。

「わかつたよ、今度 集まろう。おまえが段取り組んどけ、言いだ
しつぺなんだから

「了解」

佐野は にまつと笑い、軽い足取りで教室を出つた。

誰が行くか。

俺は心のなかで舌を出した。

集まる田には風邪ひいてやるつつの。

授業中、台本に入れられた修正記号と田を通した。

演劇部の連中は赤ペンで書き込んでいた。

そこをチヒックしてこくうち、だんだんムカムカしてきた。

『セリフ長すぎ』 10箇所ほど

『女の子を出して欲しい』 女装したい部員がいるらしい

『無理!』 6箇所ほど

『登場人物を増やしてほしい』 知るか!

何だこれ! 好き放題書きやがつて!

しかも最後のところで、

『全体的に長いので30%くらい削つてください』

だとおお?!

どんどんけゆつべつセリフ読むつもりだ、てめえらー。

いや まだ ちやんと素読みして 時間を計つて調整してんだよー。

昼休み。

弁当を食い終えた俺は、台本を掴んでラグビー部の部室に向かつた。

当然、陶冶に文句をつけるため。

台本には青ペンで いわちからの返答を書き込んでおいた。

素直に直してやる部分よりも、てめえらが考えなおせ、バカ。的部分のほうがずっと多いんで、もはや台本は青と赤の文字がきつしつ。もとの字がよく見えない状態になっていた。

「おこな、陶冶ー。」

怒鳴りながら部屋のドアを開けた俺は、室内を見てギクッとした。

陶冶は不在。
代わりに間々原がいた。

ひとつそこへ元気と180度 方向転換し、
「おーーー、何だよ 逃げるのか?」「
背中からの低い声に、ムカツときた。

「はあ?誰が、なんで、逃げなきゃいけねーんだよー。」

つて、再度くるっときびすを返す。

「俺は陶冶に用があつて来たんだ、てめえにはねーから出て行くんだつーのー。」

「门口で待つてりゃいい。そのつぢ来るだろ」

そりつと返されて、返答に詰まる。

「逃げる気がねえなら、普通はそりあるよな?」

ぐぐ。

腹立つけど その通りなんで、俺はわざとズカズカ室内に踏み入り、

間々原から最も離れた場所に どかっと座った。

「そこ尻が痛えだろ? こっち来れば」

などと声をかけられ、

「尻の肉にも たまには刺激を与えたほうがいいんだよつ」

勢いだけで言い返した。

間々原が呆れたよつに「ふん」と鼻で笑う。

…相変わらず憎たらしい奴だつ！

「吉良、演劇部の台本書いてるんだつてな」

何食わぬ顔で 奴が聞いてきた。

「佐野がそう言つてた」

「……」

会話する気 ねえんだけど。

俺は短く「関係ねーだろ」と答えた。

「うちの態度なんてお構いなしつて感じで、奴は慣れた仕草でタバコに火をついた。

「どういう心境の変化？ おまえ、そういう面倒なこと引き受けるタイプじゃねえだろ」

唇から細く煙を吐きながら、のんびりと話を続けてくる。

校内で平然と喫煙する ド不良の分際で、こいつの成績は常にトップ。

教師に絶大な信頼があつて、この部室を『漢字検定研究会』が使うと申請し、まんまと確保した張本人。

友達でいれば、かなり頼れるし 面白えし、いい男。でも。

「どーでもいいだろ」

ぶすっと答えると、

「どんなストーリーなんだ？ その台本」

いっしに手を伸ばしてきた。

俺は反射的に飛び上がり、台本をぎゅっと抱きこんだ体勢で後退した。

みつともない動きだって直観はあるけど、
触られるよかマシー！

間々原は若干目を丸くして、そんな俺を見た。

「おおせのねがいがんじゆうなん」

くすっと笑い、くわえていたタバコを携帯灰皿にもみ消した。

「まだダメなんだ？俺のこと

「はねつ？」

「アホ二つ子」といふやつが一つのアホンダラー。

思わず吠え付いたとき、間々原が立ち上がった。

「もう行くよ。俺がココに来ると、吉良のストレスにならうだし？」

その言い方にカチンとくるけど、いなくなってくれるのは有難い。

ホツとした次の瞬間、

目の前に奴がしゃがみ込んできた。

「…っ！」

気が緩んでいた俺は、逃げる隙もなく間々原に抱きしめられた。

「何っ、だよー！ めえ、放せー！」のっ

ジタバタする前に、もつ両手は纏めて捕まえられている。

このクソ野郎は、マジむかつく」と云長身で、去年までバレー部でアタッカーだったから筋力もある。いわゆる文武両道つてやつ。どんだけ俺が、悔しい思いをしたことか。

「ヤめ！ ……っ！」

奴が顔を近づけてきて、
その狙いが分かった俺は必死で首をひねつたけど。
痛いほど顎を掴まれ、呻き声は間々原の唇にかき消されていた。

『ねえキラっち。こここのシーンなんだけど、後ろからのまづがよくない？ 間々原あ、俺らでちょっと上演してみよーよ』

1年前。俺が書いた小説を読みながら佐野が言った。

『いいよ』と応じる間々原。

あれが おかしくなるキッカケだった。

実演して見せてもらいうとか、体験してみるとか、何アホなことしてたんだろ。

あんときの自分に往復ビンタしてやつてー！

「…つ、 んん！ う

間々原の舌が、当然のように俺の口のなかに入ってくる。

力いっぱい押し返そうとするけど、奴の身体はびくともしない。
そーだよ、こいつは…こつも。

安心させといて、油断させといて、圧倒的な力でねじ伏せる。

だから怖かった。

顔を見たくなかつた。

もつと恐ろしいのは、
嫌悪感はすぐえのに、
やがて男の部分が快感を捉えること。
抵抗する力が抜けてくこと、だ。

「ふ…、んつ…」

こんなん、嫌だ。
前とあんなじじゃねーか！

がりつ。

気がつけば間々原の唇に噛み付いていて、あいつはゆっくり俺から顔を離した。

口の端から僅かに滲む血を指先で拭い、不思議そうに見遣る。

その隙に俺は奴を押しのけ、転がるよつて顔を出した。

勢いよくドアを開けると 田の前に陶冶がいて、危うく ぶつかるところだった。

「…おわっ、ビビった！ どしたのキラちゃん」

俺を見てそう叫び、

室内にいる間々原を見て ますます田を丸くした。

「えええー、珍しいなあー一人が一緒なんて。めっちゃ久々じゃね？」

明るく声をかけてきたけど、俺は言葉が出なかつた。

けど間々原は。

「ああ。でもまた5人で集まるつって話が出てる。陶冶にもそのうち 佐野から連絡いくと思うぜ」

何もなかつたように笑顔でそう返し、じーー寧にも一言付け足した。

「そうだよな、吉良？」

「んのクソヤロおー。」

「」で平然と そうだよー…とでも答えられたひ すぐえだひつか
ど、
やつてやつてえけど、無理つー。

俺はふいっと顔を背けた。

「やー、ちくしょー。

「」機嫌ナナメみたいだ。俺は退散するよ

笑いを含んだ声が聞こえ、
いつたい何なんだテメーのその余裕はー
つて頭に血が昇つた。

奴が出て行き、ムスッとした顔で部室に戻る俺に、
お~お~お~い~と陶冶が当惑顔で言い出した。

「おまえら何なん? ケンカでもしてんの?」

「してねーよつ!」

俺の隣に座りながら、奴は首をぶんぶんと振る。

「いやいやあ、どう見ても変だよ? つーか…キラちゃんが『コヒ
来なくなつたのつて、ソレが原因じゅねえの』

はあ?

じりつと睨むと、陶冶は一呼吸置いたあとに ケロッと言つ放つ
た。『だからー、ママちゃんとケンカしたせいじゅねえの? 半年

前の人と、一人とも明らかにおかしかつたじゃ？ いんや、
うーん、正確にはみんなちよこいつどつくんだった

「へ？」

「いつだけは なんも気付いてないと思つてた。
陶冶がいる昼休みは、4人とも普通にしてたから。
それでも妙な空氣は溢れていたし。」

「…ギーでもいいだる、終わつたことだ。あんときも、別にケンカ
とかじやねーし」

やつ答へると、陶冶はへりりと笑つて あつせり頷いた。

「ならいーけど。キラちゃん プリン食つ？ 購買で買つて来たの、半
分やるし？」

「こいつの『一キート』助かるな。」

「こりない。それよか、台本… 再考あつまへつだぞ！」

「マジか？ 僕は2口『無理！』入れただけよ。『10秒間ジャ
ンプする』と『十地固めをあわぬ』の二口」

「はあ？ なんで無理？！」

「演劇部員はフツーの人間なのよ、キラちゃん！」

せつせつ もちと握つちまつたんで、かなりシワが寄つた台本を
ひらげ、

俺たちは打ち合わせを始めた。

頭のなかから 間々原を追い払つた、若干苦労したけど。

陶冶は、フィジカルに不可能と思われる部分だけを削除し、あとは脚本家（＝俺）の意向を大方了承してくれた。

もともと俺が初めて書いた小説を「面白い！」と絶賛したのも、メジャー雑誌に投稿（勝手に）したのもコイツ。

互いの狙いどころや外せない部分は把握してるので、話し合ひはサクサク進んだ。

赤・青チェックがはいつた台本をコピーして陶冶に渡し、一仕事終了。

ちょうど休みも終わった。

この程度の修正なら、たいして時間かかんねえな。

俺は授業中にこゝそりケータイを出し、ちやつちやと作業を済ませた。

小説を書くときもそうだけど、授業中つて超集中できる。

俺の場合、執筆に使うのはケータイだから問題ないし、

学校という特殊な背景に身を置いている状況が肝心だと思つ。

つか正直、家にいるときつて他にやりたいこと たくさんある。ゲームだら、録画した深夜番組を観まくるだら、ぼけえーっとするだろ。

大忙しじゃん。

放課後には修正が終わつてたんで、SDカードを陶冶に持つてつ

てやれりつと思つた。

でも演劇部で知つた顔は陶冶と宝生だけだし。

部室の前まで行つたけど、ドアを開けるのに躊躇した。もしあの2人がいなかつたら困る。あんた誰?とか言われそーだ。

陶冶にメールして、取りに来てもらひつか。

そう思つて引き返さうとしたとき、

「読んだ 読んだ! マジひつくり返つたあーーー!」

ドアの向こうから大きな声が聞こえてきて、ふと立ち止まつた。

「めつちやエロかつたよな! ブラックなんとかつて、ほんとに吉良先輩?」

「陶冶先輩が言つてたんだから100%そーだ!」

「うわー、あの先輩を見る目 変わりそ! 超厳しくてピシッとしてそーなのに、中身はエロエロ、みたいな」

「すました顔して、いつもエなことばつか考へてんのかなあ。あんなふうにされたいつて願望を小説にしてたりして!」

「いいー!俺、吉良先輩ならイケル」

「俺もつ。でも掘られるのはお断りつす」

ぎやはははは。

大笑いしてやがるノータリンどもの声をしみじみと聞き、

さて。どんな言葉で奈落のソロに突き落としてやうーか。

つて画策していたら、
ぽんと肩を叩かれた。

振り向くと宝生がいる。

見たことのない真剣な表情で。

そのまま軽く肩を引かれ、

ドアから少し遠ざかつた俺に あいつは にこりと笑いかけた。

そのままガチャリとドアを開け、

「み、みみ、みなさんっ！ 台本を書いてくれた吉良先輩が来てく
れましたよおっ！」

ムリヤリ作った明るい声で言い放ち、
俺を前へと押しやつた。

好き放題 言っていた直後に 本人登場で、
室内にいた部員らは当然 完全フリーズだ。

「うちもどんな顔していいか分かんねーしつ。

微妙な空氣の中、宝生が一生懸命に話し始めた。

「あ、あのっ、みなさん知つての通り、先輩はとつても忙しい人
なんですっ！ それなのに演劇部のために無償で脚本を書いてくれる
なんて、感謝感激ですよねっ！ この機会に お礼を言いましょう
よっ！」

げ。

これ どんなノリ? どんなプレイ?!

「いつも全員、俺がどんな小説書いてるか知つてんだぞ。
さつきもそのコトで さんざん盛り上がり上がってやがったわけで。

しかし。

「吉良先輩! 台本ありがと!」やこましたつ

「会いたかったつす~!」

「めっちゃよかったです、あの脚本!」

好意的な歓待で囲まれた。

本人を前に悪口は言えねえのか、
とりあえず褒めといつと思つたのか。

何にせよ、きよつとなる俺の肩に、背後の生徒がそつと両手を置く。

「やっぱ先輩はすごいですね。みんなのハート、がっちりキャ
ッチ! しゃつてしますよおつ」

つてやあ。

はは…。

まいつか。

「俺はコレ持つて来ただけだから。詳しいことは陶冶から聞け」
は聞かなかつたことにしといてやる。

「俺はコレ持つて来ただけだから。詳しいことは陶冶から聞け」
そう言つて宝生にSDカードを手渡し、さつさと出て行くことに
した。

「吉良先輩！」

ドアに手を伸ばしたとき、よく通る声に呼び止められた。
振り向くと、いかにも自分に自信があります的な、やたら堂々と
した奴がいた。

「台本、マジいいっす。演るの楽しみです」

別にこいつのために書いたわけじゃねーけど。
と思ひながら「どーも」と答えると、

「どうしても宝生が主役じゃないと駄目なんすか？」

食いつきそうな勢いで問いつめてきた。

同じようなことを何人かに聞かれたけど、こいつが一番実感こも
つてるな。

「最初にそう言つたはずだけど」

「大事な大会なんです！」

熱氣ムンムンで力説してきた。

「失敗するわけにはいかないんです！ 見て分かるように、宝生はまだ1年で経験もありません。発声だって出来てないし、舞台のことが何も知らない、精神的にも弱い。見た目も地味だし すぐ噛むし動作もキヨドッてるし、主役が務まるとは思えません！」

おお、滑舌いいなーこいつ。

演劇部つて感じするわ。

といつシンプルな感想を持ちつつ、俺は答えた。

「そんなん、どーでもいいし」

呆氣こられたよう、相手のよく動く口が止まつた。

何か言い返していくかと思つて数秒待つてやつたけど、どうやら返答が思いつかないようなので、俺はそのままドアを開けて出でいった。

一瞬だけ室内を見たとき、宝生がマックス猫背で小さくなつて姿が目にはいつた。

ひょっとして俺のせいで、あいつ 部内での風当たりが強くなつちまつてたり？

…面白えじやん。

今度聞いてやろう、

上靴に画鋲入れられてねえか？つて。

俺の執筆活動は とても緩やかなペースで続いている。

だいたい毎日 学校にいるとき、好きなだけ好きなよつに 自分のＨＰに書いている。

他にブログもやってるけど、そつちは趣味のレース観戦（つってもテレビで、だけど）のことがメインで、日記と執筆活動の報告もちよこちよこ。

仕事としては、雑誌に掲載している50ページ程度のシリーズものが月に一本。

ネットで有料配信されている長編が一つ。そんだけ。

長編のほうは秋頃に完結予定なので、そのあとどうなるかは未定。次回作は巫女×悪霊もので、みたいなことは言わてるけど、さすがにそろそろ受験勉強しねえとな。

どんな体位にしよう、どんな場所で、どんな道具を使って。そんなことばっか考えてる場合じやねえ。

放課後に図書室でブログのチェックをしていたら、珍しく風から書き込みがあった。

『土曜の八耐、マジでスゴかったね。決勝でクラッシュしたとい田

の前で見ちゃった。Husse

「じつスズカまで観に行つたんだ?

くそー、いいな。

親父さんがレース好きで、時々風も連れてつてもうつてこられるようなのだ。

ちなみに、Husseは互いにレジションド的ライダーの名前をHusseに使つてゐる。

『危ねーよな、ギリギリのスタンスだつたし。あの段階で仕掛けてくると思わなかつた! Hukuhoku』

とじうレスを ireたら、
すぐに返事が來た。

『コソマ数秒 フラットだつたから挑発に乗つやつたんだらうわ。ね タイヤチーンジのあとだつたら ああはならなかつたの。Husse』

そう、やうだよ!

いつもパワー——ンとしてゐるのと、車やバイクのこととなると
風は超汎えでる。

ここに影響されて、俺もレースを観るよになつたんだよな。

さつそく返事を書くとしたと、
次の書き込みがもう入つて來た。

『とじうで話しかけていい? 風』

「え？」

思わず口に出し、ぱっと顔を上げると、図書室のドアのところから、凪が顔を半分だけ覗かせていた。

「掲示板のなかで聞くんじゃねーよ、こんなこと！」

直接言え、直接っ！

呆れちまうけど、イラついたりはしない。
俺にしては珍しいけど、なぜか凪には腹が立たない。
「イツの ほんわかオーラがすこぎて、尖った気分になれないのだ。

「『めんね。久しぶりだったから ちょっと声かけにくかったんだ』

そういつて、凪は向かいの席にことんと座った。

「でもおぬし、元気そうよかつた」

ぽわーんと微笑まれると、なんか癒される。

「イツと直接話すのは半年ぶりだけど、変わつてねえなー。

華奢な体型はモトクロスをやつてるよつたひととても見えないが、いつもどこかに（今は鼻の頭に）絆創膏を貼つている。
ふわつふわで茶色いくせ毛はいつも好き放題あちこち向いていて、

なんだか動物っぽい可愛さ。

初めて見たとき、トイプードルみたいな奴だと思つたつけ。

「もしかして佐野から連絡きたか？」

とりあえず、そう聞いてみた。

凪がわざわざ俺に会つに来るなんて、それしかねえだろ。

果たして奴は、うつくり頷く。

「おれは別に構わないけど。みんなと遊ぶの嫌いじゃないし。でも吉良はどうなのかなと思って」

「何だよ、どうなのかなって」

ぴくっと眉間にシワが寄る俺に、のんびり頬杖つきながら凪が言つた。

「集まるの、嫌なんじゃないかなって。なんとなくだけど

「んなことね - よ別に。… 嫌がる理由、なんもねーしつ

俺はムキになつて答えた。

ほんとはめつっちゃ嫌だけど、それ認めたら まるで何かトラップがあつたみたく思われちまつ。

そんな俺を 小首をかしげて見遣り、

「吉良、最近なにかした？」

ぽんやつと尋ねてきた。

「は？ どうこの意味だよ」

「さみが動くと、おれたちも動いちゃつか」

全く分かんねえんだけど。

同じこと聞くのもアホらしいんで、俺は黙つて続きを待つた。

「今までもそうだったる？ うーーん、でも吉良には分からぬか
も。台風の目つて、自分が中心になつて周りが大変なことになつて
たつて 別に気にしないでしょ。ただそういう役目だった、つてだ
けで」

「に、に、微笑まれても！」

けつこつひでえこと言われてんだけどー！

「誰が台風の目だつてえ？」

「そこだけは晴れてるからいいじゃないか。みんなの中心つてこと
だし」

「中心つてんなら間々原のクソ野郎だろつ。結局あいつが一番 発
言力あつたし、みんなから一目置かれてた。グルグル回されたのは
俺のほうだつてーまるで乗り物酔いみたく気持ち悪い状況に陥つ
てんだからー！」

そこまで言つちまつてから、後悔した。

嵐はそんなの知らねえはずなのに、
余計なことまで吐こちました。

「やうかな？ おれは違つて黙つたよ。やうじやなくて、うーん」

「うまく説明できないのか、少し間をおいたあとに」「ごめんね、なんとなくそう思つただけでした」と付け足して笑つた。

またかよ…。

笑顔がめっちゃ可愛いけど、力が抜けるぜ……。廻くんよ……。

「吉良先輩」

そのとき、宝生が一いちに駆け寄ってきた。

「あの、あのつ、少しだけお時間ありますか？実は」

勢いで口走り、

「あー、ア、ア」あんなもーつ。お話の邪魔をしてしまってつ

慌ててヒターンしようとする誕生日に、元風が声をかけた。

「おこでよ、ここに座つたら? おれはもう行くが」

俺は立ち上がり、宝生の頭をペンケースでばこつと殴った。

「痛あー。」

「どもるな、騒ぐな、猫背になるな。ちつちつ座れつ

「は、はひつ」

椅子をガタつかせてようやく席にひいた宝生を、
凪が目をパチクリして見ていた。

「見事に、吉良の心を満たす」「だなあ。じりで見つけてきたの~」

「俺が捕まえてきたみてえに囁ひなつつの」

呆れる俺に構わず、凪は宝生に話しかけている。

「今度、殴つても痛くない柔らかい棒を買つてきてあげるよ

「ほ、ほんとですか。ありがとうございます」

「なんだ一瞬にして意氣投合しちゃんのかなあ~?

「そんな棒で殴つても面白くねえわ

「当然、俺はそつ突つ込んでやつたけど

凪がいなくなつたあとも、
しばらくの間、宝生は、奴のほんわかウエーブにやらされたままだつ
た。

「ほんとに天使みたいだなあ、凪先輩つて…。俺、近くで見たの初めて。感激ですぅ」

「はあ？あいつって そんなふうに思われてんのかよ？」

若干驚いて聞くと、

宝生はきょとんとし、まじまじと俺を見た。

「は、はい。ていうか…漢字検定研究会の方々、5人とも有名ですよ。みなさん個性的でカッコイイから、何となく憧れるっていうか…ファンも多いですし」

なんだそれ？？

後輩から見たらそうなんのか。

本人たちのこと詳しく知らねえから、勝手に想像を膨らませてるんだな。

本性を知つたら面白えだろーな。さぞかしガッカリすることだらう。

「ファンねえ。間々原ならそーいうの いそうだけど」

「あ、あの方にはコアなファンクラブがあるんですつ。男子校つてスゴイですよね」

「げええ。入つてる奴の顔が見てみてえ！
つか、そんなモノがあるつて知つてるつてことは、こいつ。

「おまえも入つてんの？」

若干ムカつきながら聞くと、

「えつー、お、俺は、えと、…あのその、…いえつ」

なんだ、その慌てぶつはー。

否定してゐけど、めっちゃ怪しい。

なぜかイラつき、机のうえに置いたハードカバーをいりいりと中指で叩いた。

「…そんで、なにに来たんだよ、てめえは

「あー、や、そーでしたっ」

寅生は慌てて立ち上がり、アワアワし始めた。

「ど、ど、どうしよう、だいぶ遅くなっちゃった…！先輩と話すの樂しくて、ついつい…」

つてわあ…、なにをケロッと抜かしてんだか。

間々原のクソ野郎のファンのくせに。に。つて、俺に何 いだわってんだか。

「オロオロする暇あつたら わざと聞わんか！」

奴の前頭部を平手でばしんと叩いてやつた。

「は、はひつ。実は 昨日から立ち稽古に入つたんですが、ちつともつま無いがなくて… 原因は、きつぱりはつきりオレなんですが…。

吉良先輩を呼んで来いと陶冶先輩に命じられまして

「陶冶が？」

俺の仕事はあくまで脚本を書くまでなんで、
あとのことなんか知らねえ！って突っぱねる」ことは可能だ。
でも、そういうこと全部分かってる陶冶が呼んでるってことは、
けつこう厳しい状況なんだな。

俺は仕方なく、本をかばんに仕舞つて立ち上がった。

「え、来てくれるんですか？…？」

「まあ暇つぶし。」この本、もつ読み終わってた

とたんに宝生は、にこやかと微笑んだ。

「先輩つて…そういう本、好きなんですね？」

こま仕舞つたのは『ライオンボーイ』の2巻だった。

「こないだは西遊記だつたし。なんだか…意外ですつ。遠くから見たら、サリンジャーとかフィッシュジョラルトとか読んでそうな雰囲気なのに」

「誰だソレ？」

「俺、細かい文字がぎつしり詰まつた本は読めねーんだよ。イライラしていくる」

小説 書いてるから 小難しい本を読んだらうんて、短絡すぎるつつの。

「そ、それに先輩、理系クラスですよね…先日 教室にお邪魔して、びっくりしました。文理両方とも得意だなんてスゴイなあ」

「ぜんつぜん得意じゃねーわ。どっちかつーとマシってだけだ」

俺の国語の成績を知つたら、こいつ引つくり返るだらうな。とりあえず漢字は とんでもなく書けん。

ケータイ（＝変換機能）なかつたら、小説書いつとも思わなかつたし。

そんな俺に構わぬ、

「オレも今度読んでもみよつと… 西遊記」

などと言つて宝生は えくぼを浮かべて笑つた。

演劇部の部室に行くと、前回と比べ物にならない緊迫した雰囲気に包まっていた。

部員たちの冷ややかな視線がこいつに突き刺さつてくる。

「うわ、なんか知らねーけど嫌だー。帰りてえー。

とか後ろ向きな俺に、とにかく観てくれー!と陶冶が言つ。

わざわざ自分の隣に俺用の椅子を並べてくれたんで、

やれやれと溜息をつきながらソーに座った。

「そんじゃ、最初つからもう一回な

陶冶が声をかけ、キャストたちが「はい」どことなく気の抜けた返事をした。

シンと静まるなか、稽古が始まる。

冒頭の数分間、普通にいい感じに進行していった。

正直、男子演劇部つてどうよ?
と甘く見ていた俺だけど、
アウエイな環境で戦おうつて気迫を持つているだけあって、
ちゃんとみんな演技できんじゃねえか。

予想外なクオリティの高さにけっこう驚いた。

主人公登場でイッキにレベルが急降下した。

が!

緊張しまくりの引きつった表情で出て来た宝生は、
せっかく周りが作りあげた世界感をブチ壊し、
まるで地球上に現れた痛い宇宙人のように一人だけ浮きまくつ
ていた。

「ひらあ、宝生。腹から声出せー」

隣の席から陶冶がアドバイスした。

稽古の途中で声　かけていーんだ？

流れを止めちまつから黙つて観てなきやいけないのかと思つてた。

注意された宝生は「はひっ」と返事をし、さつきより若干大きい声で続きをセリフを言つた。

周りの部員たちから「またかよ」的なウンザリした空気が流れてくる。

バカバカしすぎるのか、失笑している奴もいる。

そいつらにはムカツクけど、

今の俺、それ以上に宝生に腹が立つてゐる。

怒りでワナワナ震えるほどだ。

なんばなんでも酷すぎんだろう？！

「宝生、視線を泳がすなー」

「は、はひっ」

「ふらふらすんなよ。足 踏ん張つてまつすぐ立て」

「はひ」

陶冶が注意し、宝生が答える。

そんな遣り取りがしばらく続き、俺はついに切れた。

「ぶちつ！」

て音が聞こえた、はつきりと一

気がつけば席を立ち、先生の背中に飛び蹴りをお見舞いしていた。

「どかつ！
ばたん！」

見事 ひつくり返つたあいつは、
「ざけんじゅねーつ！…」

考えるより先に怒鳴りつけていて。

「てめえは誰だ？！ ああ？！」

「ひつつ！？ む、オレ…は、ほ、ほつしょつ…でふ」

「違えだらうが…」のボケ！…」

叫びとともに、座り込んでいる奴の足を 思い切り蹴りあげた。

「い、痛つ」

「今は『タナカ』だる？！ 陸上歩兵隊 一等兵のタナカ！… そ
れなのに素のままノコノコ走つきやがつて、てめえはなに一つ演じ
てねーじゃねえか！」

「えつ…。

つてカタチに頭が動いたまま、あいつは固まつた。

「どうこいつもつでソコに立つてんだよ！俺が考え抜いたカツコイ

「イ台詞を台無しにしゃがつて！これからつてトコで観る気失せさせやがつて！」

そこまで吠えて、俺はやつと我に返つた。

宝生は震えながら田に涙をいつぱい溜めて
他の部員たちも完全に硬直しちまつてゐる。

しました。

いくらなんでも暴力はよくなかったか。

「立て。ちょっと来いっ」

俺は宝生の腕を掴み、立ち上がらせた。

悪い、陶冶。10分くらいノイツ抜けをしても

——おお？ おー、了解ー！」

部長の許可が降りたんで

宝生を引つ張つて部室を出ていつた。

「わつ。 ふ。 ひー！」

と、宝生が形容しがたい声を上げているのは、俺に水をぶっかけられたからだ。

部室を出てからトイレに直行し、

奴のメガネを取つて 水道の水を頭にかけてやつたんだ。

「てんぱい、な、何をする…ふは」

ハンカチを顔に押し付け、ぐいぐい拭いてやつた。

「ちつたあ目え覚めたかよ。背筋伸ばせ、おらつー。」

濡らした前髪をかきあげるように上へ持ち上げ、正面にある鏡に顔を向けさせた。

なにも隠すものがなくなつた宝生の顔は、やつぱハツとするほど美形で。

鏡のなかで目が合つと、じつちが若干ドキリとするくらい。

けれど中身はあいつなんで、途端に目が泳ぎ始めた。

「う…あのぉ、メガネ」

「タナカはしねえんだよー髪もあげとけ！」

後ろ頭を掴み、よく見えるように鏡に近づけてやつた。

「いいか、こいつはタナカ。明るく闊達で、いつも人の輪の中心にいるような奴。思ったコトを何でもハキハキ喋るから時々相手を傷つけるけど、自分に正直で まっすぐな人間」

「……」

そんなこと、台本を何度も読んでいるはずの宝生には重々分かっ

てんだ。

けれど、俺の口から言つて逃げ道を無くしたかった。

「そういう主人公を書いたんだ俺は。さつちつ演じろよ」

「……」

鏡から視線を逸らせようと、あこつは必死で顔をのけぞらせた。

「むり……でふ。や、やっば……俺に……は」

「できる」

なんの確認もないのに、なぜかスルリとその回答が口から飛び出した。

「おまえはできる。俺が言つんだから間違いねえ」

「ふ……」

びくつと肩を震わせた宝生は、ふええええ！と情けない声をあげて泣きだした。

あーーあ、ついに泣いたか。

みつともねー顔しやがつて！

でも奴の大きな瞳から涙がぽろぽろ零れ落ちたとき、鏡のなかのその表情に目を奪われた。

初めて会つたときも感じた。

水飲み場で顔を洗っていた宝生が、なぜかずっと頭に焼き付いて記憶から消えなかつた。

それだけコイツが人の印象に残る…言い換えれば 影響を『与える、

存在なんだと、

俺のなかのどこかが強く反応したんだら。

だからってコイツが主役を張れる人間かどうかなんて、今でも分からぬいが。

「簡単だろ。自分と間逆なタイプと思えばいいんだ」

ふと思いつき、そつ言つてみた。

たぶん、きつかけ。

やる気はあるんだから、
何かちょっとした きつかけがあれば、その気になれるんじゃない
かと。

「…はひ?」

鼻水をすびすば啜りながら、あいつが首を傾げる。

「タナカは、おまえと全く逆の性格の人間。そう思えば演りやすく
ね?」

「…確かに、ひつぐ。タナカさんは…オレが、いいなあつて、こん
なふうに、なれたらなあつて、うつぐ。理想のタイプ…れす」

「だろ!舞台のうえだけでも、なりたい人間になれるんだ。そう思

つたりひめじゅと楽しむね?」

「あ…」

今初めてソーパーマント付いた、つむづむ、

「あ、そつかず」

とあこつは涙で濡れた頬をピンク色に輝かせた。

「あ、オレつ、日本100回以上読んだんですよ。そのたびにタナカさんに憧れて、ズキズキワクワクして。喋り方や仕草も、自分なりにいろいろ想像したんですね。こんなときタナカさんならどうするかな、なんてことある?」と彼に置き換えて考えさせつたりつ

「こ、こじゅねえか。そのまんま演じつやーんだよ。つじゅ、戻るぞー。」

「はひつー。」

ちゅうとほマシな精神状態になつたか。

そー思つて、メガネは俺が預かつたまま 部屋に戻つた。
しかし。
部屋のドアを開けようとしたら、またしても室内から声が聞こえ
てきた。

「だから戻つたんですね、あこつは無理だつてー。」

ドアノブに手を伸ばしかけていた宝生の動きが、ぴたりと止まつた。

おーおーい。

「やつですよーー。」それで吉良先輩も分かつたはずです、あいつの演技の酷さが。やつめだつて超ブチ切れてたし」

「今ならまだ間に合います。陶冶部長、主役を堤^{つつみ}に替えましょう」

「やひせーださーー。タナカのセリフは全部はこります。すぐ対応できまーー。」

「の声、こないだ俺に意見してきた奴だ。

こつら、宝生が降りたれること前提で、密かに先のことを計画していたらしい。

それにして、このタイミングの悪さ。

隣に立つ宝生の顔を見ると、思つたとおり、完全に硬直していた。

「…堤先輩、すじこ。自分が割り振られた役のセリフも完璧なのに、主役のぶんもゼンブ覚えたなんて…」

関心してビーする！

「あのなあ、宝生」

「や、やひぱ…オレなんかよつ、堤先輩がやつたまつが…」

消え入りそうな声で咳くあいつの目から、
やつと止まっていた涙が、また一粒ぽつりと落ちる。

「このバカがっ！」

俺はカツと頭に血が昇り、
自分でも信じられない行動に出た。

宝生の襟首を掴み、ぐいっと引き寄せ、
唇を重ねた。

今なにかしねえと、

じつちを向かせないと、

また宝生が暗い泥のなかに埋もれていく前に、引っ張り上げねえと。

ただ、そう思つて。

全くのノープランで、

とつさに出た行動だった。

普段の俺なら死んでもしねー、こんなこと一人並み以上に嫌悪感持つてんだから！

なのに今は、「ぐく当たり前なことに思えた。
コイツを何とかしたい」という自分の気持ちが、素直に態度に出た。
ただそれだけのことだ、と。

軽い音をたてて唇を離すと、
あいつは零れ落ちそうなほど目を見開いていた。

「スイッチいれたから」

きつかけ。

もしコレがそれになるなり。

「おまえはできる。つか、おまえがタナカ。生み出した俺が言つん
だから間違いねえ！」

じつと見つめていると、

責めでいたあいつの顔に、だんだん朱がさしていった。

同時に、凍り付いていた表情が緩んでいく。

ドアの向こうから、相変わらず、主役交代を要求する部員たちの声が漏れ聞こえてくるけれど、やがて宝生はふわりと笑った。

「……ほんと、吉良先輩って……むちゅくちゅだなあ

さつきまでと別人のような雰囲気じびきッとする。

もちろんそんなの顔に出さず、

「なんか文句あつかー！」

勢いよく吠え付いてやつた。

あいつは、

「いいえ

小さにけれど、はつきりと答えた。

「あつがとうござります。なんか…今まで白痴、もうつちやつた
かも

俺は頷き、勢いよく部室のドアを開けた。

「待たせたな！ おらおらあ、てめーら 無駄話してねえで もつ
かい最初からだ！」

突然 高飛車に命じる俺を、部員どもがポカンと見る。
陶冶だけは「ぶははっ」と大笑していた。

「じょうがねえなあ）。超ワガママな脚本家先生たつてのリクエス
トだ。叶えてやっかー」

いつものゴルい調子でそう言つて、部員どもに指示を飛ばした。

そのあと立ち稽古で、宝生の様子に全員が驚くことになる。

演技力は他の部員の足元にも及ばないし、
声も、動きも小さい。まだまだ舞台のうえでやれるような所作じ
やない。

けれど、堂々としている。

わづきまでのオドオドした様子が微塵もなくなり、背筋がぴんと伸
びているし言動に迷いがない。

加えてあのルックスだ。

真ん中で しゃんと立つてゐるだけで存在感がある。

「宝生、そこはもうちょい聞を空けて

「話しながら ゆっくり前へ出る。うん、そんな感じー」

陶冶からのアドバイスも、さつきよつずつと踏み込んだ内容になつている。

いつの間にか周りの部員たちも真剣に稽古を見つめていた。
ヘタクソだけど、あいつの一生懸命さが伝わるから目が釘付けになるんだろう。

「どんな魔法をつかつたんだよお、キラちゃん～」

田の前の役者たちに視線を固定したまま、陶冶が一いや一や笑う。

「あいつ、なんで演劇部にはいつたんだ？」

俺も前を見たまま、質問で返した。
回想シーンにはいつたといひで、
しばらへ出番のない宝生は端つじに引っ込んでいる。

「大勢のまえで何かやるとか、苦手なくせに。引っ込み思案で氣弱なくせに。なんで？」

陶冶は何も答えなかつた。

稽古を見てる最中なんで、そつちに集中してんだろう。

「ひつちも別に返事を催促しなかつたんで、

「姉ちゃんに負けたくねえから、ついたたなあ

だいぶ後になつて そう言つてきただときには、
なんのこつちや？と思つちまつた。

「あいつの姉ちゃん、演劇部なんだよ。しかも紅凜女子高の3年。ハクレン

夏の大会で見れるだも、おまえも来いやー」

それって、前に陶冶が言つてた 『こいつらの天敵か。男子高のくせに演劇部なんて、つていつもバカにしてくる、毎年優勝している女子高』。

「陶冶は知つてんのかよ。どんな女?」

「それがさあ、吉良ちん並みにキツツイ性格! いつもケンカ! 」ハジケして超『ええんだじえー』

「俺を並べんなつ

どかつ。

足を踏んずけてやつた。

「アウチ! 気持ちイイ! 」

ちつ。つまんね。

こいつマジだった。

『』しても、宝生にそんな姉がいたとは意外だ。

「姉弟なのに性格は全く違つてわけだ?」

「顔は激似だじえー。今みたくメガネ取つて髪上げると よく分かるわなあ」

「そーなのか？」

ちよつと興味を引かれた俺に、
思い出したつてふうに陶冶が付け足す。

「ああ、なんなら検索すればあ？一発で出るじゃえ」

「何が？」

「宝生の姉貴。HND48とかいうグループに入つてつから」

はあつ？

それつてあの超有名な作詞家がプロデュースしているアイドル
グループから派生した、
「Jの地区の女の子たちで結成されたアレ？」

「早く言え、バカヤロー！」

驚かされたことに腹がたち、思わず怒鳴つちまつた。

稽古中だつた部員たちがビックリして動きを止めちまつたんで、
「あ、悪い」「慌てて謝つた。

宝生も不思議そうにこいつを見たけど、
すぐに演技を再開した。

タナカになりきつているあいつの横顔を眺めながら、
俺はポケットに仕舞つておいたメガネを手に取つてみた。

だから顔を隠したがったのか？

超有名なアイドルと姉弟ってこと、知られたくなかったから？

詳しいことなど、なんも知らないけど、知るつとも思わねえけど、ただのガラスが嵌つたこのメガネを通して、あいつの気持ちが透けて見えた気がした。

最後まで通したあと、意見交換会みたくなった。
ざつくり全体の流れを見て、修正すべき箇所や気になる部分をあげていく。

いくつか意見を求められたけど、

俺から告げることは、もうなさそうだった。
部員のみんなは脚本の内容をしつかり掘んでくれてるんで、あと
は自由に書き換えてくれって感じ。

主役を替えようといつ意見も、もう とりあえず出ないようだし、
途中で退室をせてもらうこととした。

「あつ！ き、吉良先輩っ。ありがとうございましたっ、あのっ、
オレ、ホントこういふ、あんなことまだっ、」

「げー！」

「いいから！」

俺はぎょつとなつて、大バカ者のダダ漏れな言葉に大声でかぶせ
た。

「はつあいつ言ひとくべーおまえの演技は小学生レベルだ！ また見に来るから、そんとき今より成長してなかつたら百叩きの刑だかんな！」

「ええひ、ひや、ひひーー、そ、それは困るんで、がんばりまふつ」

ふん。

鼻息で答へ、預かっていたメガネを奴に突き返した。

そのまま部室を出て、下校するため一旦自分の教室に戻ったわけだが、

今頃になつて、俺 何やつてんだろ？と思つた。

いくらいじが指名したとまゝえ、あいつが主役にならうがなるまいが、どーだつていいのに。

面白そうだから そんな条件を出してみただけで、いじらから協力する気も手を貸すつもりも たりさうなかつたのに。

キスとか、なんでしちまつたんだ？

でも嫌じやなかつた。

自分からしたんだから 当たり前なんだうけど。

全然違つた。

：間々原ど。

奴 関連で また嫌なことを思い出しそうになり、俺は首をぶるんと振つてソレを追い払つた。

最初は、出会えてよかつたと思つていた。

たまたま掃除当番が一緒にだけで、こんなにも気の置けない仲間が出来るなんて、すげえラッキーだと。

俺にとってこの高校は、ダメモトで受けた判定の学校だった。不合格だったときは、やっぱなーー!って自分も周りも大笑いしたもんだ。

ところが後になって補欠合格の知らせが届き、みんな揃つてひつくり返つた。

その時点で 親しい奴らと ことごとく別れちまって、ほとんど友達なしのスタート。

しかも補欠で入った事実は、ことあることに自分だけ格下なんじやねえかつて 勝手な思い込みに繋がったため、自分から周りに溶け込んでいく勇気をなくしてた。

背中に「補欠」って書いてあるわけでもねーのに、そんな目で見られてるんじやないか的、勝手な劣等感。

授業についていくのも大変だったし、分からないとこうがあつても誰にも聞けなかつた。

俺が頭悪いのバレちまうんじやないかつて、ヘンなプライド。

そんな中でできた友達だつたから、なおさら嬉しかつた。

5人とも古い映画が好きという共通点が わりとすぐ判明したん

で、

週末にレイトショーを観に行くのは恒例になつたし、
そこから派生して演劇やミュージカル、レースやスポーツ観戦、
美術館、博物館。

誰かの趣味が 他の奴らに どんどん影響をあたえ、どんどん拡
がつていった。

陶冶が部室にテレビを持ち込んでからは、昼休みのたびにDVD
を見るようになつた。

とはいっても 音が漏れたらマズイんで、片方づつイヤホンをつけて
交代で聞く。

およそ快適とは言いがたい不自由な環境なのに、校内でこつそり
見てるつてことが俺たちのワクワク感を倍増させた。

あるとき、陶冶が演劇部をつくると言っこい出し、
こつか舞台監督になりたいと打ち明けた。

つられて他の奴らも将来の夢なんかを口にした。

嵐はモトクロスのフリースタイルのプロライダー。

間々原は親が経営してる会社を継ぐと抜かして周りを白けさせ、
つまんねー！と俺が突つ込んだ。

佐野は… なんだっけ？ あいつ黙つてたかも？

俺は小説家になりたいと宣つてやつた。

真剣に考えていたわけじゃない。

なにかデカイこと言つて、すげえなあ！つて反応が欲しかつただけだ。

こんなときにも俺のへんな負けん気が出ちましたのは、自分だけ補欠つてことにまだ拘つてたのかもしれない。

でも もともと物語を転がすことは好きで、
退屈な授業中とかによく、4コママンガならぬ4行ストーリー
をノートの端に書いていた。

?結婚式の最中に大地震
?花嫁が入れ替わっている
?隣の式場の花嫁だつた
?自分の花嫁は死んでいた・隣の式場の花婿も死んでいた・しょ
うがないので隣の式場の花嫁と結婚式を挙げた
みたいな。

こんなことがあつたら面白えよな、
有り得ねーけど笑えるよな、というイロイロを考えるのが大好き
なのだ。

そのとき ちょうど、ウケを狙つてエロ小説を書いてたから、全員に回して読んでもらつた。

今はこんなん書いてつけど、そのうち超やべえ大作を書くからさー。
なーんて、全くそんな予定などないくせに 堂々と大ボラ吹いた
つけ。

読んでもらつたエロ小説は大好評で、続きを書け！と4人ともか

らオファーがきた。

請われるまま、『面白がってどんどん続きを書いていいから』、
いつのまにか陶冶がソレを出版社に送りつけていたわけで。

いきなり家電に『弊社から配信をせて頂きたいのですが』と、
電話がかかってきたときは、顎が落ちるほど驚いた。

『なんだよ陶冶、このペンネーム。ブラック・パールで!』

『いやあー、うへへっ。ウチの近所にあるフィリピン・バブの店
名。キラちゃんの小説ん中にフィリピン女性が出てきてたから、こ
れでいいかなあーって』

『そいつが登場したの、たつた3行じゃん!』

というひと悶着はあったものの、
未だペンネームは変更していない。面倒なんぞ。

一作目の売れ行きが意外に好調だったらしく、すぐに次回作の依
頼が来て、

『なんかアイディア出せっ!』

4人に泣きついた。

なのであの頃は、依頼を受けるたびに漢研の部室に集まり、俺
のH口小説の内容についてみんなで会議していた気がする。

あれはあれで楽しかったんだ。

4人ともけっこう とんでもねーH口ソードを出してくるんで、
それを拾つて文章化するのも、書いたものを読んでもらうのも面
白かった。

『 なあ間々原。ちょっと上演してやんね? キラりんも 実際に見た
ほつが書きやすいだらう』

佐野があんなことを言こ出すまでは。

でもつて間々原が『 いこみ』と軽く応じるまでは。

『 いのシーンだね? やつは後ろからのはつがそそる感じないか
?』

そう言つて佐野は間々原を後ろに立たせ、両手に持つた小説の口
ピ-を読んだ。

『 見て、あんなに太陽が赤い。もう行かなくちゃ… これ以上お父様
をお待たせ出来ないわ』

外は真昼間で、まつたく夕焼けじゃなかつたが、佐野は窓に両手
をついて空を見上げた。

その背中を間々原が抱きしめる。

『 嫌だ、離したくない。父上に撃たれても構わない』

まつたく躊躇ナシなんで、見ていろ! しつちが恥ずかしい。

『 いこひ、よおやるわ。羞恥心 ねーんかな?』
隣でポテチをぱりぱり食つていた皿に いつそり耳打ちすると、

『 書いたのは吉良でしょ?』

ケ口りとした顔で返された。

いや、そーだけど。
こいつも大概だな…。

『だめよ、ギルバート叔父様』

ちなみに、この小説の設定はドイツで、第一次世界大戦らへん。上官である兄の孫と寝ているヘンタイ男の話だった。

『ではエリザベス。せめて太陽が沈むまで』

『叔父様つたら。あのが沈むのに10分とかからないのに』

薄く微笑んで佐野が言つ。

こいつって異様に女役がハマるし、ビッククリするほど演技力の持ち主。

これまでにも ときどき有名な映画のセリフを譲んじて 陶冶をときめかせ、

『佐野さまあ！演劇部に入つてええ！』

としつこくスカウトされていた。

けど いつも断つてたつけ。

演劇部が嫌だというより、

佐野には部活に入る気が そもそも全くないみたいだった。

『1分でも1秒でもいい。おまえの蜜を味わい尽くさせておくれ』

セリフを読みながら 間々原は佐野の顎を斜め後ろに向かへ覆い被すように顔を重ねた。

「ええ？！」「う、マジでキスしてね？
思わず声を上げそうになつた。

俺の位置からだと、間々原の後ろ頭でよく見えない。
ドリマとかでたまに見る、なんちゃつてキスだよな。
きっとそりだ、そーに決まつてる。

隣の凪を見ると、相変わらず顔色ひとつ変えずに一人を眺めている。
ポテチを齧りながら。

凪が平然としてんのに、俺だけ騒ぐのも何かシャク。
やつ思つてぐぐつと言葉を飲みこみ、田の前の光景を見守りつと
したけど。

佐野が左手を回し、間々原の髪に埋める。

その指の動きが妙にやらしいし、間々原の両手が佐野のシャツ
の裾から侵入し始めたし。

そりや確かに小説のなかでは、このあとギルバートヒリザベス
は夕陽が沈むまでの僅か10分の間に服も脱がずに忙しなく激
しいセックスをする展開だけど。

どこまで再現する気だ、てめえらはー

そのうち佐野は、ほんとに感じてるよつた息づかになつてくる
し。

間々原の手は、どう触つてんだ？！って角度で服のなかに入つて
蠢いてるし。

もう、シャクだとか何とか言つてる場合ぢやねー！

『いー加減にしどけつ、おまえらーーー。』

俺はついに大声でストップかけた。

その途端、一人はあつさりと離れて 観客である俺と凪に笑顔を向けた。

『参考になつたか？』

間々原が言つ。

あ、なんだ…。

マジでそのためにやつてくれてたんだ？

『まあ、うん…。確かに 後ろからのほうがいいかも

』『あ、ポテチ！凪ちゃん、俺にもひょうだい』

佐野が明るく言つて、俺と凪の間に座り込んできた。

全くいつもの様子に戻つた二人に、心底ホッとした。

それに、実演してもらつて分かつたけど、
だんだん陽が沈んで暗くなつていく窓に手をついた女を
らやるシチュエーションはなかなかいける。
色彩が頭にぱつと浮かび、ビジュアル的にもいい。

結果的に 実演してもらつてよかつたと思つちまうんだから、人間という生き物は 驚きの出来事にも慣れていくものなんだな。

それ以来、たまに『小説の参考』と称し、実演して見せてくれるようになった。

昼休みは時間がないんで、ソレをやるのはいつも放課後。そして間々原が部活をサボつたとき限定。

演劇部で忙しい陶冶は、幸か不幸か常に不在だった。

言い出すのは必ず佐野で、相手役はたいてい間々原。

佐野の演技はいつも真に迫つて、

こいつマジで間々原に惚れてんじゃね？！つて、見るたびに俺は惑わされた。

「よく稀に、凪と間々原のペアのときもあった。

その場合も 指示を出すのは佐野だ。

『凪ちゃん、このシーンなんだけど、ちょっと間々原と絡んで見せてくれる？立つてるだけでいいから』

てな具合に。

凪のヤツもいつたい何を考へてるか分からないが、大人しくになりになつていた。こいつの場合、なにか頼まれて拒否すること自体、めつたになかつたけど。

それにまあ、服を脱ぐわけでも ホントにやつちまうわけでもねえし…。

まあ、つまりは単なる遊びだったのだ。

間々原には常に入れ替わり立ち代わりカノジョがいたみたいだし。

でも一度だけひやりとしたことがある。

高校生同士のスワッピングカップルが出てくる話の続編を依頼されたときで、

『3Pの強姦シーンを入れよ!』といつアイディアを佐野が出したときだ。

『実際にやってみよー! キラちゃん、けやんと見てなよ!』

例によつて佐野が指図し、間々原と一人で凧をレイプするといつ場面を演じて見せようとした。

『どうする、床に押さえつけるか?』

『四つんばいにしたほうが刺激的じゃね?』

『凧、もつと本気で抵抗しねえと』

あーでもなーこーでもなーいつて意見しあつてゐるうちによかつたけど、

実際にやりはじめたら、だんだん怖くなつてきました。

押さえつける二人の目が異様にギラギラしてゐるし、凧がマジでジタバタ暴れてるよつて見えたし。

間々原のヤロウは、ビームでやる気だ? つてヒヤヒヤするまで辞めなかつたりする。

このときもそうで、奴は凧のズボンのなかに手を突つ込もうとした

ていた。

ベルトを外すまでなら これまでにもやつてゐるけど、中身を触るとなると 下手すりや法に反するつつのーー佐野ならともかく(つて言つのもへんだけ) それ凪だしーー

『おいつ、間々原ー停止、辞めだ 辞めーー！』

俺は立ち上がり、間々原の襟を掴んで引っ張った。

びくともしなかつたけど、
奴はすぐに凪から手を離した。

『大丈夫かよ、凪つ？』

間々原を押しのけ、下にいる凪の様子を見よつとした。

しかし、奴は。

『え、なにが？』

ケ口リとした顔で、ぴょんと起き上がつた。

『や、その…どいつも怪我してねえ？』

『何言つてゐの、吉良。そんわけないだろー』

あはは。とか笑われたし。

『それだけ迫真の演技だったってことだな』

間々原もくすくすと笑う。

『俺ら、キラッちのおかげで俳優になれるかもね。3人でデビューする?』

などと佐野に言われる頃には、もう後悔していた。

ストップかけなきやよかつた!くそお!

こいつらといふと、時々 自分だけガキっぽといつか、余裕がないといふか。

一人だけヒヤヒヤしたり 慌てたりしてゐみたいで、ちょっと悔しかつた。

だからかな。

間々原の誘いに乗る気になつたのは。

それは去年の夏。

珍しく佐野も嵐も用事があつて不在で、一人だけで漢研の部室にいた。

俺たちは、いつものようにイヤホンを片耳づつはめて映画を観ていた。

間々原が喫煙するんで、やたら室内が煙つていたのを覚えている。

その頃 俺はミスター・ビーンにはまつていて、第6巻が観たい気分だつたんだけど、

間々原が「風とともに去りぬ」がいいと言い張るもんだから、ジャンケンして、負けて。

仕方なく、髭面オヤジ＆化粧の濃い女の恋愛映画を観ることになつた。

まあ、ベタベタした内容じゃねえし、主要人物が一人とも、気が強くてスパッとした性格なんで、観ていてイラつくことはない。

そいつらが熱烈なキスをする有名なシーンのとき、

吸っていたタバコを携帯灰皿に押し付け、間々原が言い出した。

『吉良。小説では何度も書いてるけど、実際にキスしたことあるのか』

『ないけど。別に支障ねーし』

『経験させいやうか。そのまゝが実感のこもった文章が書けるだろ』

何 言い出すんだ、アホが。

そう思つと同時に、

ここで嫌だと突っぱねたら、また笑われるんじゃないかと思つた。

キスする勇氣もねえのか、

なにを怖がつてるんだ、みたいに。

それでなくとも佐野とコイツは、…とさぞ引き風も、俺の目の前でイロイロ実演して見せていて。

いつも見ているだけの傍観者な俺は、3人に比べて そういう行為に遅れているというかついていけないというか、置いてけぼりになつてゐる氣は、うつすらとしていた。

だから頷いちゃった。

『してみろよ』

間々原は口元に笑みを浮かべ、
すぐに俺を引き寄せてきた。

初めてのキスがコイツになるとは、想像もしてなかつた。

触れた瞬間、キモつ！って思いつきし引いた。

なんだこれ、なんだこれつ。

それなのに下半身がゾクゾクしてくる。

『ベロ出せ、吉良。こんなのはキスといえないぜ』

『はあ？！ っ、ふ！』

嫌だ、キモイ！
タバコ臭え！

ぬるぬる、ねちょねちょ、

こんな深いキスするの、H口小説に出てくる架空の人物だけじゃね
えの？！

一般人もすんのかよ？！

そんなことでパークつてた俺は、

やっぱ かなり相当ガキだつたんだろう。

間々原の手がシャツのなかに入つてきたときは、
身体がくにゃくにゃくで口クに抵抗できなくなつていた。

胸やら腹やらの腕やら、好き放題に触られて。

『ちよ…、待て、ストップ。じいまだ、実演する気だよつ

『相当たまつてゐな、吉良。もつ勃起してゐる』

言われた直後、奴の手がズボンのなかに侵入していた。

『おい！ わ…つ』

その手から逃げようと身体を捻ると、
のしかかつてくる間々原の重さに耐えきれず、気がつけば仰向け
に倒れていた。

もがく前に、もう俺の両手はまとめて奴の左手に掴まれている。
何が起きているか把握できないまま、

ズボンのなかのアレは 奴の右手に握りこまれていた。

『ひつー』

『おまえのつて、じつじつ色で こんなカタチしてたんだな。かー^一
わいい』

奴は言葉で煽りながら、カタチをなぞるよつこむつくつとソレを
撫である。

『 もともと … つ 』

『 他人の手で扱かれたと超感じるだろ。参考になつたよな？ おまえの先つちょ、もつびしょ濡れだし 』

『 … つ。くそ、離せ、ヘンタイ 』

『 たまらないな。負けず嫌いで、いつも精一杯 虚勢を張つてるおまえの そんな姿。なあ吉良… 考えたことある？ あんな小説書いてる おまえを想像して ハチ切れそうになつてる読者がいること 』

カツコイイと思つてた。間々原を、心の底では。

俺にないもの全部もつてる。

悔しいけど イイ男だよな、つて。けど。

そんな薄い憧れは、この瞬間 木つ端微塵に砕けた。

ワケわかんね…、
こいつ怖い。

知らなかつた、気付かなかつた、こいつ変。

恐怖心は増すのに、

下半身のアレは 奴の手で弄られてどんどん張り詰めてく。

このヤロウ、なんでこんなに手コキ上手いんだよつ！

俺の感じるところ全部わかつてゐみてえ。

…つて、おなじ男だからか？

『 ガマンする顔もいいけど、吉良がいくつも見たい 』

手のなかのモノが限界近いのを感じ取ったのか、間々原が囁いた。

『見せろよ』

『ヤだつ。てめーに、なんか！ 死んでもつ、い、や、だ！』

部室のまえの廊下を走る足音が聞こえてきたのは、そのときだった。

バタバタバタ…。

間々原は半田になつて俺を見おろしたあと、自分がズリ下げた俺のズボンを 手早く元どおり引っ張りあげた。

直後、バタンとドアが開き、

『なあなあ、ここに俺の > Stand by me < あつたよなあ～！？』

大騒ぎしながら陶冶が駆け込んできた。

俺たちには目もくれず、DVDが並べてあるカラー・ボックスに直行する。

『文化祭でやつてーのよお。あれつて男子校にピッタリじゃね？なんせ女の「」が出てこねーんだじえ～』

ブツブツ言いながら陶冶がDVDを物色してゐる間に、俺は慌てて ズボンのチャックをしめた。

と陶冶が喜びの声をあげる頃には、からうじてパニッシュ状態から脱していた。

『初めてコレ観たとき、自分の気持ちにリンクしてて震えたなあ。みんな一度くらい考えねえ？ 気の置けない仲間たちと共にどこか遠くへ旅立ちたいって』

青臭い。

陶笛で言う。
というより、緑色かな。

陶冶が言ふ

『うちの学校って、色に喰えたらゼッテ一緑だろ。しかもブリリアントグリーン。苦くて、あふれ出しちゃな。この映画のイメージと超シンクロしてんなつ』

にへつと笑つて、奴はDVDを掴んで立ち上がる。
そこでよつやく、こいつをしげしげと見た。

『おまえら何してたの？ テレビ止まつてんじやん』？

しまった。とっくに映画終わってたんだ。

俺が言い訳を探す前に、

『次は何を観るかで揉めていたところだ』

間々原が答えていた。

『吉良は「メーティがいいって言い張るけど、俺は泣ける系が観たい

んで』

むかーー！

あんな」とじとじて、平然としてやがるのが実に憎たらし。

『ぐははっ！ おまえら趣味あわねーもんな』

ズバツと指摘し、陶冶が大笑いした。

『けだママッち、キラが泣ける映画苦手なの知つてる？ いつだつて、フランダースの犬観てたとき、このヒト テレビのプラグ引っこ抜いたじゃん。ビックリしたじえーあんときば』

『やうやう。世界中のときなんて、勝手にスponジボムのDVDに入れ替えちまつたもんな。あれはウケた。さすが吉良って感じ』

『いつらあー。

目の前にいるヒトをエサに盛り上がってんじゃねーよつ！

だいたい、なにが楽しくて わざわざ悲しい気分になる映画なんか観なきやいけねえんだ、

そつちの感性のほうが俺には理解できんわ。

心んなかでほぼ全人類に向かつてクレームつけてたら、

「そんじや！ 邪魔したなつ」

つて陶冶が部屋を出て行こうとしたんで、俺も慌てて後を追つた。

間々原と二人きりという場所から逃げたかったし、

こんがらがつた自分の感情を落ち着けたかったためもある。

『あれ？ 映画観るんじゃねーの？』

不思議そうに振り向く陶笛、
咄嗟に尋ねた。

『どんな色だつナ？ ブリリアントグリーンヒ

『部室の壁の色じやん。俺が塗つてやつただろー』

『ああ、あれか』

秘密基地だ、と決めた翌日には「コイシもつ塗つてたよな。
そのつえから みんな次々とポスターやら旗やら貼りまくったん
で、

今じゃ ほぼ100%壁なんて見えないが。

『ただの縁と違つただじえ、きらつきらなんだ。おほつ、キラちゃん
の名前が一個も入つちやつた』

などと語つて、陶笛はへりへり笑つてたけど。

俺には全くピンとこなかつた。

自分の高校生活がそんなキレイな色だとま思えねえから。

部活にも所属してないし、女子と付き合つこともなく、青春っぽ
いナニカとはまるつきり無縁。
どちらかっこーと薄暗い色のまつがあつてる。

しかも、たつた今 ますますグレイになる出来事があつたばっか
だし

そのあと俺は、しばらぐの間 部室に通つていた。

間々原のヤロウにはムカついたけど、いろいろな面でパーfectな あいつにも一時の氣の迷いぐら
いあるだろうと、
百歩譲つて なかつたことにしてやるーって思つたんだ。

それに、あのあと奴は全くいつも通りだつたし。

これまでと同じように毎休みは5人で集まり、くだらない話題で
騒ぐ。

放課後は陶冶抜きで、4人で映画を見たり 小説のこと話をあ
つたり。

まるで何もなかつたようだつた。

もしかしてアレは夢だつたのか?と思つべらこの平常。

でも、

そんなの錯覚だつた。

一人きりになると間々原が豹変することが、すぐに発覚したから。

他の奴らがトイレに行つたり、飲み物を買いに行つたりする ち
よつとの間でも、奴は絶対にその機会を逃がさなかつた。

触つてきたり、キスしてきたり。

「ケ政权で俺を煽りながら。

そんなことが2～3回続けば、さすがにキレる。

とはいって、こいつの分が悪すぎー。

こんなコト誰にも相談できねー…つか、信じてもうえるかどうか
さえ分からぬ。

「人きりじゃないときには、そんな気配 憲尾にも出でねえんだか
ら。

力でかなう相手じゃないし、頭の回転だつてカンペキ負けてしまし。

俺に出来ることなんて、部室に近寄らなくすることくらいだった。

居心地のいい場所に行けなくなるのは残念だし、
イジメに負けたつか、セクハラに屈したつーか、
まるでこいつが敗者みたいで悔しかった。

けど カマ掘られる危険度に比べたら、そんなん些細なことだー！
間々原ならマジやりかねんー！

そして、因果なもので この屈辱的な経験が役立つこともあった。
ちょうど締め切りが迫っていた短編に、何にもアイディアが閃か
なかつた俺は、

奴から受けた仕打ちを かなりそのまま小説にした。
実際に自分が体験したことなんで、文章に起こすのは簡単だった。

もの書きの因果なサガつてやつ？

転んでもタダじゃ起きねー！つか、

そんくらいメリットがあつたつていいだろ的な。

そうすることで凶太い人間になれた気がしたし、俺じゃない架空の人物がされたこと、なんて無理やり被害者を転嫁し、自己処理していた。

それで平穏な日常が戻ってきたと思っていたのに、半年ぶりに会ったあのクソヤロウが、なんも変わってなくて睡然とした。

つかビビった。

どうしようってんだよ……。

ケータイを見ながら、俺は重い溜息をついた。

画面には、ついさっき佐野から送られてきたメールが。

『漢研のみなさんへ 次の土曜、午後から部室に集まることに決定！ 半年ぶりに5人全員揃う記念すべき日なので、もしも来ない奴は罰として全員のお願いを一つづつ叶えること。

陶冶とキラ、なんか一人で楽しそうなことやってんね？ そこんとこ、詳しく聞かせてもらうよ』

ちょっと前に、都合のいい日をメールで聞かれていた。

どうせドタキャンするつもりだったから、いつでもいって返事したつけ。

まさか 行かねー奴に罰が下るとは。

佐野のヤツ、勝手なルールくつづけてきやがって。

でも、まあ…、ようは あのアクマと一緒にできなんらなきやいいんだ。

陶冶も来るみたいだし、大丈夫だよ、な。

了解、と書いたメールを送信したとき、最終下校時刻を告げるチャイムが鳴った。

もうこんな時間が。

俺は読みかけのハードカバーを閉じた。

放課後は図書室で過ごすことが多い。

家には口クに本がないし（マンガはあるけど）、ついつい楽なほうに流れてゲームばっかやつちまうんで、

漢研に行かなくなつてからは ほぼ毎日来るようにしていた。

いちおう小説書いて報酬をもらつている身なので、本は読むべきかなと。

こんなふうに書くと、勉強のためみたく聞こえるけど、もともと物語というものが好きなので、読み始めるまでは億劫だけど だんだん夢中になる。

つつても、俺が読めるのは ほぼ児童書かノベルスだけど。

図書室を出て、

昇降口のところで陶冶と鉢合せた。

「おっ、キラちゃんじゃーん！ 珍しく遅えなあ？」

「まあね。けつじつ勉強してんだぜ、俺はー」

「それにしちゃカバンが軽そだじえ？ 窓っぽの弁当箱しか入ってねーだろお」

「いのせえな、いのじけだひ」

適当なこと言ご令にながら靴を履き替え、俺らは並んでグラウンドに出た。

「演劇部、いま終わったのか？」

「うん、まあ こわーー」

「大会つて再来週だつけ。稽古は順調か？」

「そーさなあ、とつあえずはなー」

さつきから返事がめっちゃ曖昧なんだけど。

俺が立ち稽古を見た日から、一週間くらい過ぎていた。

あれから宝生が俺に会つてくることもパタッとなくなつたんで、多少気になつていた。

けど、こつからわざわざ様子を観に行くとか有り得ねー。

あつと順調なんだろ？と判断し、放つておいた。

どひせ なにかトラブつたら、また泣きついてくるだらうと。

期末テストがあつたし 小説の締め切りもあつたんで、俺的にもバタバタしてたし。

「何だよ、なにかあつたのかよ?」

さつさから陶冶の態度が らしくないんで、つい聞いちまつた。

「わははははっー!」めぐ「めぐ~。やつぱ不自然だつたあ?」

奴は笑いながら頭をかいだ。

「いやさあ~、俺つて根が素直な人間なもんで、言いたいこと我慢すんの苦手なわけよ」

あーそうですねー。

淡々と受けて、俺は先を促した。

「また宝生が問題かかえてるとか?」

大当たりらしく、陶冶は親指を立てて見せた。

やつぱか。

思わず はあ、と重く溜息をついた。

「で、今度は何。どんなトラブル起こしてんだよ、あいつは」

といふが、陶冶は答えずに校舎を指差した。

しばりへ返事を待つてみたけど、その仕草を繰り返すだけだ。

「殴つていいかあー？」

イリツときて聞くと、「いいよおーー」って嬉しそうに。ハリの手が痛えだけとか、アホくさいんでヤメた。

「言いたいのか言いたくねーのかハツキにしきつーの！」

「こやー、キラちゃんには言つなつて口止めされたるんで、言いたくても言えねえんだよねえ～」

は？

あいつの意思ある二コアンスに、今度こそ俺は首をかしげた。

無意識に、陶冶が指差したほうを見遣る。

「…用事を思い出した。俺、ちょっと戻るわ

ハリ出ると、陶冶はあつせつ手をあげた。

「やつか。んじゃ、俺 先に帰るなあ～」

俺たちは互いに背を向け、別方向に歩き出した。

ああいつの、口が軽いとは言わねえのかな。
確かに喋つてはいいけど 結局バラしてんだから、同じ」とのよつた気がする。

でも陶冶のやり方は正しいと感じじる。常にマトモだし、他人を傷つけない。

ちやらんぽらんだけど、日和つてない。信頼できる奴だ。

演劇部の部室に近づくにつれ、宝生の声が聞こえてきた。

この棟には もうほとんど誰も残っていないんだろう。

俺の足音が響くへりへり 静まり返つてゐるんで、声がよく通るのだ。

ドアを開けなくとも分かつた。

みんな帰つて 誰もいなくなつた部室で、あいつは一人だけ残つて稽古してゐるのだ。

奴の演技がダメダメなのは、声を聞いているだけでも分かる。自信のなさと迷いが伝わつてくるから。

おいおい、何やつてんだよ。

また振り出しに戻つちまつたのか？

カツときた俺は、よつぱりドアを開けて怒鳴りつけてやるーかと思つた。

いつものように頭を叩いて、渴をいれてやつてえーー！つて。

でも陶冶に口止めしてゐるつてことは、一丁前に 俺には知られたくねえわけで。

ドアに伸ばした手をぐぐつと引つめた。

そのとき、

「ひりつ、宝生。声が出てないぞつ」

こきなつあいつが叫んだので、驚いて数歩 後退つた。

「おまえはもう、発声からやつなおじだつ

つて…おいおい。

どんなプレイだよ。

「そり聞いたこのちのほうが 恥ずかしさに悶えちまつだろーが！」

「あ、え、い、う、え、お、あお！」

バカデカイ声を聞きながら、頼むよおーと思つた。この調子で「ん」までやる気か？

「タすると、「よしつ、次は早口言葉だ、宝生つ」とか言に出しかねない。

痛い、痛すぎる。

つか、

あれから一週間、コイツずっと一人で残つて練習してたのかな。

宝生なりに、なんとか自力で解決しようと頑張つてんだよな。

「」で俺が声をかけたら、水を出すことになる。

ていうか、今の痛い一人突つ込みを聞かれたと知つたら、あいつマジで悶え死ぬかも。

俺なら悶え死ぬ。

結局 そのまま帰ることにした。

見なかつたことにしておけ。たぶん、そのほうがいい。

だけど、あいつの発声練習は こつまでも俺の耳に残つてた。
布団にはじつて 眠るとあくまで。

あ、せ、し、す、せ、そ、そー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8477z/>

ブリリアントグリーン close to kira.

2011年12月26日20時50分発行